とある不死身の自動再生

ウルフガイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある不死身の自動再生

【Ｎコード】
Ｎ４９５７Ｍ

【作者名】
ウルフガイ

【あらすじ】
学園都市の番外位、『不死身』の体をもつ男子生徒、鳴川　昴の物語。
彼はいかなる物語を紡いでいくのか。
巨乳ビーム女や変人研究者女、スケスケ眼鏡の風紀委員にクラスメイトの堅物女性。彼の周りにいる女性との不思議な日々も見所です。

不定期更新中。

プロローグ（前書き）

書いてみたかったネタ。
不定期です

プロローグ

日常が壊れたのはいつからだったか。

両親が死んだ時？

研究所へ来た時？

実験対象にされた時？

死を上回る苦痛を受けた時？

きっと全て違う。

そうだ。

俺が全てを失った飛行機事故に巻き込まれた時。

その時、ただ一人俺だけが生き残った時だ。

あの時俺は『チカラ』に目覚め、そして全てを失った。

新しく得たものは、どことも知れぬ研究所での辛い日々。

その生活から救ってくれた人がいて、俺は今ここで生きている。

この、『学園都市』の一生徒として。

とある不死身の自己再生　プロローグ

とある朝。
どこか遠くの方で鳥の鳴き声のような音が聞こえた。

「……」

ゆっくりと重い瞼を開けていく。
しんと静まり返った部屋。
がらんとした自分の部屋を見て思わずため息が出た。

「にしても、久しぶりにあんな夢を見たな」

眠ぼけ眼を擦りながら半身を起こし、枕元の時計を確認する。
――7時前。
普段の俺ならもう少し粘ってベッドに引きこもっている時間だ。

正直言うと、俺は朝が強い方ではない。
まあ、早く目が覚めたからにはこのまま起きてしまおう。
そう思って俺はベッドから降り立った。
思い切り伸びをした後、首をゴキゴキと鳴らす。

こういった疲労には働いてくれない自分の力が恨めしい。

まあ贅沢は言わないでおこう。

どっかの誰かに怒られかねない。

キッチンに入って冷蔵庫から栄養ドリンクを取り出して一気飲みする。

不健康だろうが知ったこっちゃない。

朝はこれ一本で十分だ。

「ぷは～っと。さて、めんどくさいけど今日も一日頑張りますか」

自分の恩人兼保護者が『警備員』なんてモノをやってるせいで、俺までめんどくさい仕事をやらなきゃならんのだ。

俺は学校の制服に着替えて『風紀委員』の腕章をつけ、重い足取りで家を出た。

「で、ど～してこうなるのかねぇ？　俺って不幸？」

「うるせえぞてめえ！　黙りやがれ！」

ガツッ！

「痛っ……ちょっとは人質に優しくしろよな～」

現在、拳銃を突きつけられて両手をあげてる状態な俺。

風紀委員の仕事の巡回……というかブラブラしていて、ついでに銀行で金を降ろそうと思ったらこれだ。

痛いのは嫌いだけど、やるしかないんだろうな……ハァ。

いくら俺でも拳銃って言う鉄の塊で頭を殴られれば痛いんですよ～。

「あの……大丈夫ですか？」

「あ～、問題ないない！　全く持って大丈夫！　だからお嬢さんはそこらに座ってな」

「あ……はい……」

こうやって心配してくれる同じ人質の女の子が涙目になってるんだからやりがいはある。

うん、女の子を救うのに怪我を惜しまないってのはいいもんだよな。

というかこいつら、白黒（同僚の女）が言ってた連続発火強盗の犯人か。

火をつけて爆弾に点火しようとしてるし。

なるほど、それでシャッターをぶち壊して逃げるのか……

「ってやばいじゃん！」

このまま何もしなかったら上司のスケルトン眼鏡（同僚の女）にまた嫌味言われる。

絶対に言われる。間違いない。

現場にいたのに何もしなかったのかってまた言われる。

仕方ない、やるか。

俺は外していた風紀委員の腕章をつけ直して犯人達に突撃した。

「おい！　俺は風紀委員だ！　もうそこらへんでやめとけ！」

「ここまでやっといてやめられるかよ！」

「デスヨネ～」

「てかお前さっきのヤツじゃねえか。反抗しなかったってことは無能力者（レベル０）なんだろ？　俺達に指図するんじゃねえよ！」

そう言って犯人の一人が炎を掌に出す。

あは～、強能力者（レベル３）くらいですか？　熱そうですね。

「黙って従ってくれないと俺が困るんだけどさ、ダメ？　あ、あと一応俺は無能力者じゃなくて……」

「うるせえんだよ！　黙っとけ！」

そう言って炎の球を飛ばしてくる犯人。

……やりたくないけど俺は右手を前にかざした。

メチャクチャ熱そうな炎の球が俺に迫る。

なかなかのスピードで飛んできたそれは俺の右手に迫り……どこかのツンツン頭の旗男みたいに打ち消すことはなく、見事に着弾した。

「あっちいいいいいい！」

右手を前に出してたおかげで体の方とかまでは燃えてない。でも服はもうダメだな。右手燃えちゃってるし。

というか、俺が叫んでる間に犯人が爆弾でシャッター壊して外に出て行った。

また怒られるじゃねえか！
早いとこ追いかけ無きゃ……ていうかまだ腕燃えてる！
ええい我慢しろ！　俺は毎日のようにこれ以上の痛みを受けてきたんだ！

猛スピードの車に轢かれたり！

スキルアウトに頭をバットで割られたり！

何十階建てかわからない程のビルから転落したり！

ビームを発射する巨乳女に腹に風穴を開けられたり！

最近では一番最後のが多いかね。
そんなことがあっても俺はことごとく生き延びてきた！
というかむしろ生き返ってきた！
それに比べれば右手一本が焼かれるくらい……

「でもやっぱりあついいいいいいいい！」

ぬおおおお我慢しろ鳴川（なるかわ）　昴（すばる）！
腕についた火は『チカラ』でそのうち消える！

とにかく外に出るんだ！

「あ、鳴川さんじゃないですか！　どうし……ってうわ！　手！

大丈夫なんですか！？」

「佐天さん、心配はいりませんわ。あの人の能力は常識はずれですから」

「……あれ？　事件は？」

「今、解決したところですわ」

「……」

周りを見る。

ぶっ壊れた車やら道路やら。

ついでにさっき見た犯人たちも倒れている。

そして……

「あ、電撃女か」

「誰が電撃女ですってぇ！？」

「うぎゃあああああああ！」

体を電流を走るかのような……というかリアルで走っている。

比喩じゃないんだぜ。というかまじ痛いというかやばいんですが！？

「なんか煙出てますよ！？　本当に大丈夫なんですか！？」

「そんなに引っ張らないでくださいまし。鳴川さんならしばらくすれば傷跡一つ無くなりますから」

「へ？」

電撃を食らって黒こげになった俺は、５秒で復活して立ち上がった。右手の燃えてた部分もキチンと元の肌に戻っている。

「電撃女って言っただけでこの扱いはひどいんじゃないですかね！？」

「いいじゃない。あんた死なないんだし」

「というか俺高校生だぞこの野郎！　なんなんだよその態度！　初春とか佐天とか見習え！」

お前中学生だろうが！　と声を大にして言う。

しかしながら態度を変える気が無いようだ。

なんか腕組んでやがる。むかつくのでもう一言言おうと思ったその時。

「あなたはまた役立たずだったのね、鳴川？」

「げっ」

何故貴様がここに、タイムテーブル的にここにはいないはず……

「連絡を受けて来てみたの。そしたら何もせずにいたあなたを発見した。わかった？」

「おい待て。俺は別に何もせずにいたわけじゃないぞ」

「結果的に何もしてなかったんでしょう？」

「……そうとも言う」

「じゃあ支部のあなたの机の引き出しの中にあったチケットは貰っておくわね」

支部のマイデスクの引き出し……チケット……？

そんなもん……あったな、そういえば。

黒蜜堂のなぜかある裏メニュー、最高級和菓子セットの無料引換券！

俺がたまたま店長さんのお手伝いをしたらもらえた品……それを取る？

「はぁ？　……いやいやいや！　ちょっと待った！　それはやめて！」

「何枚もあったから全部……」

「ああ！？　俺がどんだけ甘いもの好きかわかってて行ってるわけ？　ねえ？」

「仕方ないわね、一枚だけにしといてあげるわ」

結局一枚取るんかい！

今回、俺は痛い思いしかしてないじゃないか。

どうしてくれようこの気持ち。

「結局鳴川さんは固法先輩に怒られるんですね～」

「あの人の事いまいちわかんないなぁ……結局なんの能力なんですか？　怪我が治ってましたけど」

「あいつも一応超能力者（レベル５）なのよ」

「えぇっ！？　そうなんですか！？」

「でも能力が能力だから超能力者の一人として数えられてないんですの。番外位ってところですわね」

「そんなにすごい人なんだ……」

「能力名は『自動再生（リジェネレーション）』どんな怪我を負っても死ぬことはなく、即座に復元してしまうんですの」

「実際、絶対に死なないのよね。だから遠慮なく攻撃できるんだけど……」

「何度攻撃しても懲りてくれないんですの」

「それは……」

「だから固法先輩がああやって懲らしめてるんですよね？」

「まあ私たちは甘いものをただで食べれるからいいのですけれど」

遠くの方でなんか気になる言葉が聞こえたけど、冗談だと信じたい。

ああさらば　おはぎにお団子　美味いお茶

なんてね。やれやれ……

――――

「夜です。学園都市の夜は危険です。でもなんで俺はここにいるの？

「黙ってついてきなさいよ」

「あい！」

夜の街を歩く俺。となりではビーム巨乳女の麦野沈利が歩いている。

こいつとは殺し合いをした程度の仲だ。

無論、一方的に俺が殺されまくっただけだが。

ちなみに戦闘はこんな感じ。

何故だか知らないけど喧嘩に巻き込まれた俺。（後ほど喧嘩というか掃除だったと知る）

腹をビームが通過、血を吐く俺、しかし一歩進む。怪我が治る。

ビームを連射、胸とか腕とかが吹っ飛ぶ、そして一歩進む。怪我が治る。

胴体が丸ごと消し飛んだ。血だまりの中から俺復活、這い寄って足首を掴んで引きずり倒した。

そして思わず倒れる麦野沈利、立ち上がった血まみれの俺。

良く考えたら服は復活しないわけだからその時の俺は真っ裸。

股間とか丸出しだったわけで。

思いがけないハプニングに俺は茫然、麦野沈利は想像だにしてなかった可愛い悲鳴を上げた。

そんな出会いを経て今に至る。

正直理解できない？　それが正解である。俺もまだ理解できない。

そして今日俺が呼び出された理由。

「映画見に行くんだけど他に空いてる奴いないから来い。以上」

そんな理由らしい。

映画を一人で見るのが嫌とかそんな性格もしてないだろうに。

「周りのスキルアウト共が鬱陶しいんだよね。一応あんたも男だからナンパ野郎は来ないでしょ」

そういうわけですかそうですか。

つまり俺はただのカカシですな。……怒ってもいい？

やめとこ、殺されるだけだわ。
そんなこと思ってあるいてたら路地でたむろしてる連中がワラワラと……
「ったく、うざったいなぁ……蹴散ら――」
「ストップ！　あんたがやったら死んじゃいますよね！？　大量殺人とか勘弁ですよ？」
「じゃあ鳴川、あんたがやんな」
「わあってるよ！　結局こうするために連れてきたんだろうが！　全く……」
俺はため息をつきながら麦野の前に一歩出た。
守る必要すらない強い女を守るって何か新鮮だ。
「兄ちゃん、いい女連れてるな？　そいつをここに置いてとっとと消えな」
「そうしたいのはやまや……」
なんか後ろで嫌な気配がしたのですぐ口を閉じる。
死ななくても痛いものは痛いのですよ。
「一応、今日は俺がこいつを守らなきゃいかんらしいからな。そういうわけにはいかん」
「じゃあ力づくで出も消えてもらうぜぇ！」

そう言って鉄パイプを持った男が振りかぶって襲ってくる。
避けたいけど、避けたら後ろの麦野に当たってブチ切れるかもしれない。
それはダメだ。

「うらぁっ！」

俺は右手で思い切り鉄パイプをぶん殴った。
すると、パイプがひしゃげてどこかに吹き飛ぶ。
ついでに俺の右手もひしゃげた。すぐに治ったけど痛かった。

「なんだこの力！　能力者か？」

「一応そうだけど想像とは違うと思うぜ？」

この能力が喧嘩において攻撃の役に立たないから、俺は色々とトレーニングしたのだ。
俺は普通に喧嘩してもなかなか強いと思うぜ？
なにせ自分の拳とか省みないで攻撃できるからな。

「さっさとかかってこい。後ろの女王様を待たせたら怖いからな」

「なめやがって！　行くぞ野郎ども！」

「「「「「おおっ！」」」」」

とりあえず全員ぶちのめす！
俺は襲いかかってくるパイプやらバットやらに狙いを定めた。

約１０分後。

「「「「「覚えてやがれー！」」」」」

「嫌だよ面倒くさい」

「遅いんだけど」

「ごめんなさい」

「仮にも超能力者なんだからパッパとしなさいよ番外位。奥の手あるんでしょう？」

「奥の手はいざという時に使うからこそ奥の手なんだよ。男のロマンだ。第四位は女だから分からないさ～」

「……」

「痛い！　細いビームが掌に刺さってる！」

痛い思いをしたけど外面的には怪我一つなく事を済ませた俺は、また麦野と歩くのを再開した。

その際、拳で相手を倒す事しかできない俺が結構時間をかけて深く頭を下げたのは当然のことだ。

「ところでどういう映画なんだ？」

「知らないわよ」

「おいおい」

「別に内容なんかどうでもいいでしょう」

じゃあなんで見に来たんだと盛大にツッコミを入れたかったけど我慢する。

こいつにツッコミ……恐ろし過ぎる。でもいつかやりたい。

そうだ、殺されても死なないんだからツッコミくらい……ハッ！

「俺は一体何を……」

「独り言とかキモイんだけど」

「すいません」

頭を下げる。

なぜだかこいつの前では頭を下げるのがデフォに……いや、スケルトン眼鏡や堅物メガネ（学校のクラスメイト）にも頭を下げてばっかな気がする。

どうしよう、俺は女に頭を下げるのがデフォルトなんて噂が広がってないだろうか。

さて、映画館到着。

麦野がソフトドリンクを購入したので俺も購入する事にする。

ついでだからポップコーン購入。

麦野が気まぐれを起こしてポップコーンを食うかもしれんのでLサイズを買っておこう。

映画館を血まみれにするのは忍びないしな。

「気が効くじゃない」

「そうじゃなきゃ今頃ここは血まみれでしょうからね」

「……あんた私の事をなんだと思ってるわけ？」

「美しいお嬢様ですよ？」

「……」

あれ？

なんか地雷踏んだ？

まあ今は大人しく映画見てるようだし、よしとしよう。

その後、映画を見終わった後の帰り道で。

「ブチ殺し確定」

「やっぱりそうだった？」

「当たり前でしょ？」

物の見事に上半身を吹っ飛ばされました。

今回は血も残さないように配慮してくれたようです。

……配慮なのか怪しいなぁアハハ。

――――

さて帰宅。

なぜだか手紙が届いていた。というか入れられていた。

保護者の黄泉川愛穂からだ。

内容は要約すると、

「もっとマシな物を食った方がいいじゃん。あと、彼女ができたんなら報告するじゃん」

ということらしい。

残念ながら彼女はしばらくできそうにありません。

しばらくは精神的ダメージやら肉体的ダメージ（すぐに治る）でそれどころじゃありません。

でもそれを癒してくれる存在なら大歓迎です。

もういいや。

とりあえず寝よう。

俺はシャワーを浴びてベッドへと潜り込んだ。

プロローグ（後書き）

あとがき

ヒロイン候補を以下より募集。

?:固法美偉……熱くなる・短くなる

?:麦野沈利……熱くなる・長くなる・シリアスになる

?:吹寄制理……ほのぼのする?・短くなる

?:木山春生……熱くなる・短くなる

最終的には意見とかを見た作者によって決まります。

第一話（前書き）

上やんも木山さんも登場。

木山さんの口調難しい。むぎのんの口調もっと難しい。

第一話

「というわけで服が無くなったりなんやらで大変だったんだよマジで」

「俺に言われても知らねえよ！　……それで？」

「なんだかんだいって最後には聞いてくれるんだな親友！」

「今まで何回俺の部屋に半裸で入ってきたと思ってやがる」

「まぁまぁ。とりあえずまた今度服を買いに行こうと思ってるんだがお前もどうだ？」

「そんなお金は上条さんにはありません！」

「この貧乏学生め」

「なんだとこの野郎！　お前が金持ちなのがおかしいんだよ！」

「やるかこの野郎！？」

「やってやろうじゃねーか！」

「俺に勝てると思ってんのか？　俺は不死身なんだぜ？」

「へっ……ならまずはその幻想をぶち殺す！」

とある不死身の自動再生　第一話

上条との戦いは熾烈を極めた。
あいつの右手での攻撃は、何故だか知らんが回復できないのだ。
おかげで地味にボロボロになった。
もちろん、上条の方もボロボロにしたが。
結果、

「なんで喧嘩してたんだっけ？」

「……あれ？」

という感じで引き分けに終わった。
というか喧嘩を続けても意味ないし、疲れるだけだろという結論に
二人同時に至ったためだ。

「とりあえずあそこのコンビニ行こう」

「なんでだ？」

「服を買うから金を下ろすんだよ」

「あ～、それじゃあ俺も行くよ」
というわけで帰り道にあるコンビニに直行。
ちなみに、俺は上条と同じ寮に住んでいるから帰り道が同じなのだ。
たまに服の替えが無くなった時に借りたりもする。

「あれ？　くっそ。なんでだ？」
「どうした？」
「ぎゃー！　カードが飲み込まれて出てこないー！」
「マジか。というかさっきまで普通に動いてたぞ？　そのＡＴＭ」
「不幸だーーーー！」
コンビニ内のＡＴＭで俺が金を引き出し、さあ上条がというところで事件発生。
ＡＴＭが不調をきたしたのだ。さすがの不幸体質と褒めてやりたいところだ。
そこで俺は誰かがコンビニに入ってくるのが見えた。
「久しぶりね」
「ゲッ、ビリビリ中学生」

「おお、電撃娘」

「……」

なんか俯いてブルブル震え始めた。どうした？
そんなこと考えてると上条が俺に話しかけてきた。

「カードの再発行ってさ。やっぱ時間かかるよな？」

「そりゃあ……まぁ、一日二日はかかるんじゃないか？」

「それまでは無一文かよ……冷蔵庫の中空っぽなのによ～」

「まあ食糧くらいなら分けてやるさ」

「サンキュー鳴川。　助かるぜ！」

バチバチバチバチッ！

「「！？」」

「変な呼び方しておいて……無視すんなって言ってんのよ！」

怒りにまかせて拳を振りかぶった御坂の攻撃を上条がかわし、ＡＴＭに拳が突き刺さった。
そしてカードがＡＴＭから飛び出した。

「おお！　すげー！　ありがとう、ビリビリ！　助かったー。いやぁ初めはこんな奴と知り合って不幸だーなんて思ったけど……」

「おい上条、感動してるのはいいけど、ヤバいぞ」
ＡＴＭをぶっ壊したせいでサイレンが鳴り響く。
おまけに画面に現れるのは「警告　攻撃性電磁波を関知」という的確な文字だ。
正直シャレにならない。
「ほら俺、風紀委員だからさ」
「は？」
「あ……」
急にポケットから風紀委員の腕章を取り出して腕につける俺を見て、上条と御坂が声を漏らした。
ちなみに俺はすごい笑顔だ。
「というわけで俺の安息のために大人しく――」
「悪い鳴川！　俺は逃げる！」
俺の言葉を途中で切ってものすごい速さで逃げだしていった。
しかもちゃっかり御坂の手を握ったまま。
俺は確かに御坂の顔がちょっぴり赤く染まってたのを見たぞ。
さすがは旗男だな。
「さて、じゃあ俺もそろそろ……」
「そろそろ……何をしようというんですの？」

……後ろに人の気配が。

「風紀委員に連絡しようと思ったんだけど、必要なかったみたいだな」

「当然ですわ。ちょっとサイレンが聞こえたから来てみれば……またサボりですわね？」

「いやいやいや！　決めつけるのはどうかと思うんだけど！？」

「とりあえず、固法先輩に言っておきますわね」

「なんでピンポイントに！？」

「その方が効果的ですの」

そう言ってニッコリ笑う白黒。

子悪魔の笑いにしか見えねえ。実際その通りだが。

「不幸だーーー！」

こういう立ち回りはお門違いだろうと思いながら、俺は空へと叫び声をあげた。

――――

特選ケーキのチケットをむしり取られた俺はジュース片手に道を歩いていた。
あいつらひどい。俺の宝をなんだと思ってやがる。
今度クッキーかなんか作ってもらおう。固法あたりでいいな。白井とかは作れなそうだ。初春は悪意全くないし。

「はぁ……」

「すまないが……」

「へ？」

話しかけられたから振り返る。
俺の隣とかには誰もいないから俺だろう。

そこにはシャツを着た普通の……いや、目の下にクマがあるちょい変わった雰囲気の女性がいた。

「駐車場を探しているんだが、手伝ってもらえないだろうか？」

「はい？　いや、暇だからいいですけど」

「そうか、助かるよ」

俺は駐車場に行く前に病院とか言った方がいいと思います。
主に寝不足と不健康的な意味で。

「それで、駐車場の特徴ってあるんすか？」
「確か……横断歩道が近くにあったな」
「いや、当たり前だろそれ。もっとわかりやすいのは無いのか？」
「う～む……」
そう言って考え込む女性。
正直言えば考え込みたいのはこっちです。
何でこんな不思議というか奇妙というか、変な女性に手伝うなどと言ったのか。
思ってみればため息ばかりだ。はぁ……
「それにしても今日は本当に暑いな……」
「そうっすね。俺の部屋なんか毎晩が熱帯夜ですよ」
「そうなのか……ふぅ……それは、大変だな……」
「そうなんだよ本当に大変で……ってぇ！？」
俺がちょっと視線をはずしている間に女性が大変な事に！？
というか……
「何で服を脱ぎだすんですか！」
「こうも暑くては汗をかいてしまってね……」

「だからって脱ぐなよ！」

「私のように起伏の乏しい私の体を見て劣情を催す男性は……」

「ここにいます！　今目の前にいます！」

「下着をつけていてもダメかｎ」

「ダメです！　だいたい起伏乏しいとか言ってるけどそれほどでも無いだろ！」

「そうか？」

「そうです！」

「だ、だが、私は別に気にしないが……」

「俺が気にする！　というかさっきから周りの目が痛いからさっさと服着てくれ！」

「あ、あぁ……」

俺は周りからビシバシと浴びせられる視線の中、彼女に服を着せて手を掴んでその場から駆けだした。
噂とかにならないよな……そうなったら死ねる。

「あぁ……ここは涼しいな」

「そらファミレスだからクーラー効いてるのは当然だ」

「それに飲み物までごちそうになってしまって……すまないな……」

「それくらいは気にしなくていいから」

俺は彼女の手を引いて、とりあえずファミレスに避難した。
さっきまであった視線はもうない……そう信じたい。
まあ視線はそんなに感じないし大丈夫だろう。

「駐車場に案内するのはどうすりゃいい？　さすがにヒントが少なすぎてな」

「そうだな……そこまで急いでいたわけじゃあないからね。思い出すまで待つよ」

「以外に……というかのんびりしてるねぇ」

「そう気にする事でもないさ……」

のんびりというか眠そうに見えるのは気のせいか？
目の下にクマがあるせいで余計に。

「ところで……君の名前は何と言うんだい？」

「え？　ああ、俺の名前は鳴川　昴だ。よろしく」

「……鳴川？」

「どした？」

「いや……私の名前は木山　春生という。よろしく」

俺の名前を聞いた反応からして、どこかで聞いた事でもあるんだろうか。

それはないか。そんな偶然はないだろう。

「……ところで、暑い暑い言ってるくせにホットのブラックコーヒーなんて飲むのか？」

「暑い時にはあったかいものを飲むのがいいのだよ。それに、コーヒーはブラックの方が目が覚める」

「それはわかるがな。気分的にアイスコーヒーで良くないか？」

「気分ね……どうも、研究ばかりしているとそういうことは考えなくなってしまうみたいでね……」

「研究？　能力のか？」

「ＡＩＭ拡散力場の研究だ。わかるかね？」

ＡＩＭ拡散力場……確かどっかで聞いたな。

そんなのを、どっかの施設が研究してたっけな。マイナー過ぎた気がするけど。やる事がいちいち陰惨すぎるんだよな。俺自身が色々とやられてたからわかることだけども。

「……一応ね。頭はいい方だ。能力的には全く役に立たんのだがね」
「そうなのか。君は一体どんな能力を？」
「詳しく説明すると面倒だけどさ。どんな怪我を負っても死なないらしい」
「死なない？」
「そ。ついでに、傷を負ってもすぐ治る。『肉体再生』みたいなもんさ。全自動だから『自動再生』って言うけどね」
「……そうか。それは珍しい能力だな」
「どーいたしまして」
額に少しだけ皺を寄せて考えながら言う木山さん。
またなんか考え事か？　まぁ、俺の能力を聞いて考えなかった研究者とか見た事ないけど。
「木山さんはどうしてＡＩＭ拡散力場の研究を？　あれって結構マイナーだったと思うけど」
「そうだね……だからこそかな。それに、今は他に目的もある」
そう言って薄い笑いをうかべる木山さん。
まぁこの人にはこの人の目的があるのだろう。
それも、かなり大切な。
「ところで、どうしてボタンを上から二つも開けているのかな？」

「コーヒーを飲んでいたら少し暑くなってね……」
「んじゃあホットなんか飲むな！」
「あ、あぁ……すまない」
「まったく……」
この人、大丈夫か？
大丈夫だよな？

「すまない。助かったよ」
「そらどうも。でも結局はあなたが思い出したから発見できたんだし、礼はいらないよ」
「そうか。それでも助かった。ありがとう」
「……どういたしまして」
その後、無事に特徴となる建物を思い出した木山さんの発言によって駐車場を発見した。
というか自分が車停めた駐車場の場所忘れるなよ。
いくら駐車場の数が多いからって限度があるだろうよ。
「それじゃあ。また」

「ああ。俺は風紀委員もやってるし、研究とかも結構やらされてるからね。また会うかもしれない」

「……そうか。それじゃあ私は行くよ」

そう言って木山さんは車に乗って去って行った。

……あの人、どうにも印象深かったしな。
また会う気がしてならない。
願わくば、その時彼女が服を脱ぎださない事を祈ろう。

――――

「とまあこんな感じで大変でさ……」

「超どうでもいいです。というかなんでそんな事を聞かされなきゃいけないんですか。超迷惑なんですけど」

「そう言わないでくれよ。麦野に愚痴なんか言ったら殺されちまう」

「でしょうね」

色々と精神的なダメージを受けた後、俺はとあるファミレスでだべっていた。
今頃、風紀委員の本部ではケーキパーティーでもやってるんじゃな

いだろうか、主に俺の持っていたチケットのおかげで。
そして俺は追い出されて寂しくファミレスにいるというわけだ。
なんて理不尽なんだろう。俺はただその場に居合わせただけなのに。
そんな愚痴を誰かに聞かせないとやってられないので、俺はたまたま見かけた絹旗最愛という知り合いの少女をファミレスに引っ張りこんだわけだ。
その際に何発か後頭部を殴られてクラッときたが、まあ問題はない。
「鳴川は麦野の前では超従順だし、愚痴なんか言える立場じゃないしね」
「それを言うな。毎回ビームで殺されてる俺の身にもなれよ。あれ、痛いってレベルじゃねえんだぜ？」
「超嫌です。麦野の攻撃をまともに受けて死なないとか、超まともじゃないですよ」
「確かに、俺くらいだろうなぁ……ある意味お似合いだったりしない？」
「超キモイです」
ちょっとした冗談なのにそんな冷たい目で見ること無いだろう。
俺はため息をつきながら伝票を手に取った。
「あ……」
「俺が払うよ。女の子に払わせるのはなんだからな」

「超露骨です。点数稼ぎですか？」

「どうとってくれてもいいよ。こういう時は男が払うもんなのさ」

だいたい、二人分のソフトドリンク代と、俺の食ってたストロベリーサンデー、絹旗の食ってたケーキ代くらいの料金だ。

それくらいは払わなかったらいかんよな。うん。

それでレジを通って店の外。

「それでだな」

「なんですか？」

「この後な、話題に上った麦野と会わなきゃならんのだが」

「超ご愁傷様です。せいぜい死なないように超頑張ってください」

「……そうだなあ。頑張るしかないよなぁ……はぁ……」

もう一度ため息をついて俺は一度寮に戻ろうと絹旗と別れた。

別に何かを期待してたわけじゃない。わけじゃないのだが……どうにも今日は嫌な予感がする。

少しばかり誰からでもいいから励ましの言葉が欲しかっただけだ。

……あれ、励ましの言葉と取ってもいいんだろうか？

「嫌な予感がプンプンするぜい……」

とりあえず、遅刻は厳禁なので少し急ごう。

なるべく痛い思いはしたくないからな。

――――

「よう、一日ぶりで」

「また吹き飛ばされたいわけ？」

「すんませんした！」

軽く手を挙げて陽気なイメージで挨拶したらコレだ。どうすりゃいいのさ。

頭下げたら満足したみたいだけどさ。

どうしろっていうんだ。今度考えてみよう。

「それで、今日は何で俺が呼ばれたわけ？」

「何か用事でもあったの？」

「いや、ないけど」

「ならいいでしょ」

んな理不尽な……もう慣れたけど……

慣れてくればこういった口調も可愛いもんさ……とは言えないな。

さすがに。

「それで結局どこに行こうって？」

「ん～、カラオケとか？」

「いやお前、絹旗とかフレンダとか滝壺とかいるだろ？　あいつらと行けよ」

「予定がつかなかったのよ。何？　私と行くのが嫌なわけ？」

「そんなわけないよ！？　ぜひ行かせていただきますとも！」

俺はあわてて答える。服をおじゃんにされる機会は少ない方がいい。というかカラオケだと？　俺は麦野がそういうところに行くこと自体が驚きだ。

フレンダとか絹旗とかはありえそうだが（滝壺は行かなそう。なんとなく）麦野がカラオケ？

全員まとまっていくことはありそうだが……麦野は、外見はお嬢様だし。外見は。

まあ麦野が歌がどれだけうまいのか聞かせてもらおう。

俺か？　俺は適当に流行りの歌でも歌うさ。

熱い曲とか歌ってるだけで気分良くなる。歌唱力は……人に聞かせても問題ないレベルだろう。

まあ、元からうまかったという事で。馬鹿どもと一緒に遊びまわったのもあるだろうけど。

「それじゃあ行くわよ」

「ああ。じゃあ麦野、案内は頼んだ」

とりあえず楽しむだけ楽しむとしよう。

――――

「なんてこったい」

「何？」

「いや、色々と予想以上だっただけ」

歌、マジでうまいんですね。
普通に流行の曲なんか歌っちゃってまあ。
うまいじゃないですか。うまいじゃないですか。
大事な事なので二回繰り返しました。

「というか普通にカラオケやってると違和感感じるなぁ」

「そう？」

「まぁねぇ……普段が普段だからさ。そっちは相変わらずか？　『アイテム』は」

「何も変わったりしないわね。いつも通りよ」

「……そうかい」

『アイテム』ってのはこの学園都市にいくつかある裏組織みたいなもんの事なんだが……細かいことはいいだろう。
俺も一時期は色々と研究対象にされたりなんだり……ともかく、そ

ういうことには結構詳しかったりする。
しかし、『アイテム』がいつも通りだということは、メンバーが無事であると同時に色々と厄介な仕事もやってるんだろう。
性格が破綻しかけてる奴らとはいえ、元は優しい……たぶん優しいんじゃないかなと思う連中だ。一応、麦野も、たぶん、普段は優しい、と思う。そうだったらいいという願望も兼ねて。

俺としては女の子は幸せそうに甘いものでも食って「あはは～」って笑ってればいいと思うんだがね。
世界はそう綺麗じゃないってことなんですよ。

「何ボーッとしてるの？」

「ちょいと考え事だよ。ままならんもんだね」

「はぁ？」

なんか俺が変な事言ったせいでこっちを怪しげな視線で麦野が見てる。
むむむ、俺は少しトリップしてたか？
まあ独り言のようなもんだから気にするな。

その時、突然部屋の電気が落ちた。

「あ？」

「何？」

そして何やら異臭が……
凄い嫌な予感がする。

「ってこれガスの匂いか！？　麦野っ！」

「ちょっ！　鳴川っ！？」

俺はギリギリ麦野に覆いかぶさった。
そしてドアが吹き飛び、部屋の中が爆炎に包まれた。
何事だコンチクショウ！

「ぐあああああああっちいいいいいいいい！」

「っち！　襲撃！？」

背中が爆炎で黒焦げになり、肉と骨を炭と化そうとする。
しかし俺は能力でそれを食い止める。炭化する端から再生させていく。
……下半身は直接燃えてはないな。ボロくはなってるけど。

「大丈夫か麦野？」

「あんたは……って大丈夫か。それくらいなら」

「勿論だ。お前のビームに比べりゃ楽なもんよ」

実際問題吹き飛んでさえいないんだぜ。
焦げるくらいはもう何ともないんだぜ。
全身氷漬けの後で粉砕されても復活した男を舐めるなよ？
一番ひどかったのは実験で焼却炉に……いや、今は現実に目を向けよう。

「さて、どうする？」
俺は焼け焦げた上着を脱ぎながら麦野に尋ねた。
まあこいつの性格上言うことは決まってるだろう。
「とりあえず、ブチ殺し確定のヤツを追うわよ」
「俺もついてくか？　麦野狙いか俺狙いかもわからんし」
「私一人で十分だから、あんたは来なくてもいいよ。とっとと帰れば？」
「お優しいこって。でも、女一人に任せるのはどうもね」
「……馬鹿にしてるわけ？」
「いやいや、心配なだけだよ。せっかくきれいなのに傷でもついたらもったいない。っと、迷う暇もなく来たようだ」
俺が場を和ませようと軽口を叩いていたら敵が再び攻撃を仕掛けてきた。
今度はガラスやら扉の破片が宙に浮いた。
念動力（テレキネシス）か。それらを飛ばそうと言うのだろうが……
「ふん……」
一瞬でその破片とかを麦野が消し飛ばした。
たぶん俺がいなくても、さっきの爆発は簡単に防げたんだろうなぁ……はぁ。
まぁいいや。昔取った杵柄ってやつを見せてやろうじゃんか。

俺はとりあえず普通にドアを開けた。
とたんに念動力で飛ばされた物が飛んでくる。
まあ待ち伏せは基本だが、俺には役に立たないぞ？
胸に刺さった腕くらいの大きさの木片を引き抜いて、そのまま麦野が出てくるのを敵に背を向けて待つ。

「あんたそんなにかっこつけたいわけ？」

「まぁね～。というか麦野はＲＰＧ的に砲台タイプだろう？　俺は戦士タイプで盾でもやってるのがお似合いなんだよ」

「へ～。なら、砲台として最大火力で敵を吹き飛ばしてあげる」

麦野はそう言って怪しく笑う。
……やべえ、ちょっと俺の影響が出たか？まあ大丈夫だろ。

「ちょっとは手加減しとけ。後片付けが面倒だからな」

「私に指図するんじゃあ……ないっ！」

俺の背後で攻撃を繰り返した奴らに、麦野の掛け声とともに発射されたビームが見事に敵を吹き飛ばした。
喋ってる最中にも攻撃を繰り返す奴らだったからな。ざまあ見ろだ。
おかげで背中が血まみれである。おまけに熱かったし。

「雑魚だったね」

「私達は超能力者なんだから当然でしょ？」

「そりゃそうか」

というか、レベル３だか４だか二人と他数人で襲撃かけるこいつらがアホなだけだと思うが。
どっからこの戦力を連れてきたんだろうな……どっかの下っ端とかだとは思うが……
まあ考えてもしかたないか。

「とりあえずここから逃げた方がいいみたいね」

「そうだな」

警備員が駆けつけてくる前にさっさと逃げよう。
……俺風紀委員だから、変なことしてたと思われたら余計まずいぞ。

「ところで鳴川」

「ん？」

逃げ出した先の建物の屋上にて。
俺はじゃあな～と帰ろうとしたところで麦野に呼びとめられた。

「絹旗に聞いたんだけどさ」

「え゛？」

「今日の昼に女の服を脱がせてたって？」

「はい！？」

どこでそんな情報操作が！？
というか木山さんには俺はなんもしてねえぞ！？
ちょっと話をしただけで！
そして麦野さん！　顔が笑ってるのに目が笑ってませんよ！？

「え～と、一応違うと言っておくけど、もしそうだったらどうなるの？」

「わかるでしょ？」

腕が光ってる！腕が光ってる！
ピカピカバチバチしてますよ！

「あの人が服を脱ぎ出したのは確かだが、俺が脱がしたわけじゃないぞ！」

「脱いだんだぁ……ふ～ん……」

腕の輝きがより一層激しく！？
俺はやっていないと言ってるだろうが！

「鳴川？」

「ハイ」

「あんた、ブチ殺し確定」

「やっぱりですかー！」

今日もこんなオチかコノヤロー！

叫び声をあげて俺は吹き飛んだ。

第一話（後書き）

あとがき

作者の知識はアニメと原作がごっちゃになってますけど、基本的には原作だったらいいな？

むぎのんの人気が高いですね。

とりあえず、アンケートは続きます。

むぎのんはツンデレ。この物語では常にツンデレ。主人公がほとんど死なないからヤンデレになる要素が無い。

ネタばれ。

今回の最後の事件が起こったのは、むぎのんが主人公とうろちょろしてるから目をつけられた。

隙を突く的な意味で。

第二話（前書き）

アッハッハ。

ちょっとはっちゃけた。

第二話

「ぬあ～～～！　甘いものが……甘いものが食べたい……っ！　早急にっ！」

街を歩きながら独り言を漏らす俺の姿はさぞやおかしく見えるだろう。
いやまあそんなことわかっててもついつい呟いてしまうのは仕方ない事だ。

なぜなら部屋の中に買いだめしてあったお菓子類が全て消えていたのだ。
そんなに食った覚えはないけど……もしかしたら吹き飛ばされた事がショックで食べまくったのかもしれない。

というわけで俺はファミレス目指して進行中なのでした。

しかし昨日は疲れた。
上半身裸のままであのビルから寮まで辿り着くのは本当に苦労した。
ビルの上を必死でジャンプして渡ったけどあともうすぐで着くというところで落ちたもんな。
その後は全力疾走だったんでマジで疲れた。
たぶん誰にも見つからなかったと思う。
というか服が消失するたびにこれはきついと思うんだ。そう思うだろ？

とりあえずファミレスで糖分を補給した後は服を買いに行かなきゃな。
昨日麦野に聞いて服やをチェックしておいたんだ。
あいつ自分と出かけるときに変な服で来るなとか言いやがって、別に服なんてどうでもいいだろうが。
セブンスミストとかいう店なんだが……まあこの辺にあるらしいからゆっくりでいいだろ。
さてさて、まずはストロベリーサンデーかでも注文しますか。

とある不死身の自動再生　第二話

甘いものを食べて満足した俺は道を歩く。
ただひたすらに歩く。
セブンスミストに向かって。

「結構人気なんだな。さすが見た目お嬢様の紹介なだけある。」
見たところかなりの人が出入りしている。
正直俺はこういうところに入るのは苦手なんだが……
「まぁあいつの紹介だし。たまにはかっこいい俺ってのを見せてやるか」

そんな馬鹿な事を言いながら俺は店へと入っていった。

とりあえずジャケットやらシャツやらジーンズやらと気にいったものを試着した後ドンドン買いこんでいく。
特に上着だけは吹き飛ばされる恐れがあるから多めに買いこんでおいた。
あと丈夫なジーンズも何着か。
下が吹き飛ばされたり燃やされたりとかするとアレだ。
シャレにならないからな。

……というか何かイヤな予感がする。
どっかで誰かに会っちゃいそうなそんな予感。

『お客様にご連絡申し上げます。店内で電気系統の故障が発生したため、真に勝手ながら本日の営業を終了させていただきます。係員がお出口までご案内を――』

「そう来ると思ったぜ――不幸過ぎるだろオイ」

上条の不幸体質って感染するもんなのか？
それともただ単に俺が不幸なだけなのか？

ともかく、服もたくさん買った事だし外に出よう。

たらりら～、たらった～♪

「はいもしもし？」

「私よ。虚空爆破事件の続報だから心して聞いてちょうだい」
「……爆弾魔のアレね。了解」
「今、衛星が重力子の加速を確認したわ。場所は第七学区の洋服店のセブンスミスト。わかった？」
「あ？　あー、わかった。というか今俺そこにいるんだが……」
「そうなの！？　なら聞いて。今初春さんもそこにいるの」
「買い物かなんかだろうな」
大方、女友達と一緒に服を買いに来たんだろう。
ただ見に来ただけかもしれんけど。
まぁ声が真剣だからそんな事が言いたいんじゃないんだろう。
「聞いて。この事件の犯人の目的は……風紀委員なの」
「何だって？」
「そして今回セブンスミストにいる風紀委員は初春さんとあなただけ」
「初春が危ないってことか」
「そうよ。だからできるだけ早く初春さんと合流して！」
「了解。不真面目な俺でも女の子のピンチにはがんばりますよ。」

「さっさと行動！」

「了解！」

いい加減ヤバいので俺は行動を開始する。
まずは入口まで戻ってきちまったから上階に行かなきゃな。
女性用の衣服とか下着とかのコーナーは何階だっけ？
俺は腕章を装備して荷物を店員に預けて駆け出した。

――――

「なんでお前らがいるんだよ！」

「あんたこそなんでいるのよ！」

「俺も鳴川が何でここにいるのかは気になるけど今はあの子を探そう！」

「俺も一応風紀委員だからな！　お前ら忘れてるかもしれないけど！」

「「あぁ～～」」

「そんな反応だと思ったよチキショウ！」

まあそんなことはともかくさっさと初春とかを探さんと……あと上条と御坂が言ってる女の事やらも！
初春もその女の子も爆弾が近くで爆発した時に身を守る手段が無い。
俺がいりゃあ盾になれるし上条や御坂なら爆発を防げる。
さっさと見つけないと……

「いたっ！」

「ってなんかヤバそうだぞ！」

「爆発寸前だ！　早くあいつらのとこに……」

先頭を走る御坂がレールガンを使って爆弾を吹き飛ばそうとしたが失敗。
今にも爆発しそうな所に俺と上条が飛び込んだ。
こういう時は俺は役に立てないのが辛いところだ。

「頼むぜ、上条」

「ああ。任せとけよっ！」

そして上条は右手を前に突き出した――

事件はあっけなく解決した。
あの後俺は事後処理をしたりなんだりと色々と忙しかったが、上条

はいつのまにか消えてやがり、御坂が外に出て犯人を発見したそうな。
犯人は介旅初矢とかいう少年。
レベル2程度の能力しかないはずだから事件は起こせないはずなのだが……
という謎は残るが、まあ確保したんだからよしとしよう。

そして翌日。
まだ残っている後処理とかで風紀委員の支部まで行って、スーパーで買い物した後に寮に帰ってくる途中で起きた出来事があった。

「あ……」

「おや、君は……」

俺は、またも木山春生と遭遇する。

――――

「また迷子ですか？」

「いや、そうではないよ。色々と準備をしていたんだ。これから忙しくなるのでね」

そう言って得体の知れない飲み物を飲む木山さん。
なんだよ、カレースープって。
というか暑い暑い言うくせにあったかい飲み物のむな。前も言ったけど。

現在は公園内のテーブルで向かい合って話している。
少し話したい事があるらしい。

「君は昨日、自分の能力が『自動回復』だと言ったね？」

「そうですね」

「その能力の強度（レベル）はいくつなんだい？」

ああ、やっぱりそういう質問か。
……思えば昨日は言ってなかったな。

「俺のレベルは5ですよ。木山さん」

「……やはりそうだったか」

「事前に調べたりしたんじゃないですか？　たぶん簡単とは言わないけど出てくるはずだから」

「そうだね。まぁ、これは確認というわけだ」

そう言ってカレースープの缶に口をつける。
しかし、俺の能力はＡＩＭとかとはあまり関係しないと思うんだがな……
外に現象を発生するわけじゃないし……

ん？　ＡＩＭ拡散力場って自然に発生させるヤツだっけ？　だったらレベル５の俺はそれが強かったりするのか？

うんまぁそれはともかく……

「服を脱ぐなっつってんだろが！」

「いや、しかし……」

「しかしもカカシもないから！　しまいにゃ襲うぞ！」

思春期の高校生舐めんな！

いくら普段から下半身ごとビームで吹き飛ばされてようがムスコは元気です！

だって不死身ですから！

「襲うだなどと……私の体には女性としての魅力などないだろう？」

「まだそんなこと言うんかいあんたは！」

女としての自覚があるんならちゃんと体の方にも自覚を持ちましょう！

そんなこと言ってたら胸が小さいこと気にしてる女の子たちがかわいそうだろうが！

羞恥とかキャストオフとか色々な意味で！

「俺の経験から言うとですね、木山さん」

「なんだい？」

「胸が大きくて起伏がはっきりしてても魅力があるとは限らないんですよ？」

「そうなのか？　しかし一般的には……」

「これは経験談なんですが、知り合いの巨乳女とか俺の扱いがひどいってもんじゃないんですよ。俺が能力のおかげで死なないからって問答無用で殺しにかかるんです」

「それは……ひどいな……」

「でしょう？　だから女性は外見じゃなくて中身だと思うわけです」

ちなみに俺的には年上の女性が好みです。

というか中身云々の前提として外見が一定レベルじゃなきゃ嫌だけどな。

どうしてもってわけじゃあないが。

「とにかくです。そういうわけならあなたも十分魅力的に見えます。マジで」

「そ、そうか……。そ、そんなことよりもだ！　君のその能力はどのくらいまで範囲があるんだ？」

「範囲って……どういうことだ？」

「君の体の損傷をどの程度まで治してくれる？　脳が損傷しても復元が可能なのか？」

「……正直言ってわからないんだよ。でもまあ脳が損傷してもなぜ

だか大丈夫だぜ？」

「……それは能力と言えるのだろうか？　何か秘密が……」

「ん？　何か言ったか？」

「ああいや、気にしないでくれ」

いや、そう言われると余計気になるんだが……

「少し、私のやりたい事に関係するかと思っただけだよ」

「まぁ、俺ができる事なら協力しますよ。ひどい実験なら慣れてますからね」

「……そんなことはしないさ。協力を頼むかは分からないがね」

「それじゃあ俺はそろそろ帰るんで」

「ああ、また会えることを楽しみにしているよ」

「記録にあった通りなら彼も……いや、これは余計な思考だな」

――――

「あれぇ？　家の前に人影が……」

「こんばんは鳴川」

「どうした？　まあとりあえず中に入れよ。荷物置かなきゃならんからさ」

「……気が効くじゃない」

何故か部屋の前に麦野がいた。
そういえばこいつって門限とかあるんだろうか。
無さそうだよな。いや、あったとしても大丈夫そうだもんな。

とりあえず失礼な態度とかできないからクッキーでもごちそうしてやろう。
というか何の用だろう。

「あ、このクッキー美味しい」

「そうだろう？　俺が苦労して入手した品だからな！」

「あんたが作ったわけでもないのに偉そうにしないでくれる？」

「すまんすまん。共感してくれたかと思うとなんとなく嬉しくてな」

「あっそ」

そう言ってジュースを飲みながらクッキーを頬張る麦野。
こう見てる限りは普通の女子高生なのになぁ……
実際はレベル５の能力者で、裏でもいろいろと仕事をしている危険な女性なのである。

まぁ、俺の事をいつもあっちこっちに引っ張っておきながら、そういった仕事には最初の一回以外連れて行ってはいない。
どうせ俺が役立たずである以上に、自分だけでできると思ってるんだろう。ああ、違う。『アイテム』のメンバーで十分だと思ってるんだろう。

正直、いくつかある裏の組織の中でも人材はそろってる方だしな。
……ところで、一体何の用なんだ？

「私、今日は街をぶらぶらしてたんだよね」

「いきなりなんだよ」

「それでたまたま第七学区の近くを通ってお前を見かけたんだけどね……」

「そら服屋に行ってたしな」

「公園で誰かと一緒にいたでしょ？」

ギクッ

「そ、そうだな、ちょっと先生とお話してたんだよ」

「へぇ……」

ちょちょちょちょっとやばいかもしししれないな。
ももしかしたら誤解とかされてるんじゃないだろうか。

「あんたの前で女が服を脱ぎ出したのはどういうわけなのかきっちり説明してくれる？」

ニッコリと『すごくいい笑顔』で言う麦野。
気のせいかな、腕が光って見えるのは。

「あれは……ただ単にあの人が変人だったからだよ。それくらいしか理由ないし」

「それ、嘘でしょ？」

「ホントだって！　あ、でもむしろ嘘言っておいた方が信じてくれたんじゃ……」

「まあもっと腹が立ってる事があるのよ」

「……どうぞおっしゃってください」

「女は外見だけじゃないんでしょ？」

「っ！？」

「知り合いの巨乳女がなんだって？」

聞かれていただと……これは死ねるぞ！　死なないけど！
というかマジふざけんな。なんで気付かなかったんだ俺。
って気付けるわけねえよ下着姿の女性が目の前にいる中で周りに気を配れるわけねえ。
というか麦野も気づいたなら話しかけるとかやればいいだろでもこいつが夜以外で話しかけてきた事ねえよそう言えば。

「誰の中身が悪いとか話してたんだろーねぇ……」

「あれはだな、目の前にいる女性として色々と足りてない人に説明するためだ」

「……それで？」

「マジですんませんでした！」

ガバッと土下座をして謝る。
……許してもらえるとは思ってないけどな。

「それだけ？」

「麦野は女性としてとても魅力的だ。あの時の言葉は無かった事にしてくれ。外見とカ中身とかは関係ない！」

「……それだけなの？」

よし、今のところ死刑執行されてない。
このまま乗り切るんだ。なんとかして乗り切るんだ。
さもなきゃ部屋が血まみれになる。

「俺は――」

俺が顔をあげながら腰を上げようとした、その時。

起こってはいけないハプニングが発生した。

バツン！

「ぬおっ！？」

「きゃあっ！？」

いきなり停電が起き、土下座の状態から立ち上がろうとしていた俺はテーブルに足を引っ掛けてすっ転んだ。

そして麦野を巻きこんで倒れ込んだ。

そして……

「なんだこの手に当たる感触は？」

とても柔らかいこの感触は……一体……

そう考えたところで麦野の体から猛烈な熱を感じた。

「この……っ！」

「へ？」

「いつまで触ってんのよおおおおおおおお！」

「ぎゃあああああああああああああ！」

その日、学園都市のとある寮から、天に向けて光が放たれた……

第二話（後書き）

あとがき

暴走せざるを得なかった。

ツンデレ的な意味で。

これ、収拾がつくんだろうか……主に麦野的な意味で。

うちの麦野はヤンデレじゃなくてツンデレだからいいんだよ。うん。

次は7月20日だな……よし。

第三話（前書き）

はっはっは。
デレが多めに書いてみたつもりではある。
あくまで『つもり』。俺の本気はこんなもんじゃないぜ。

第三話

天井に
穴が開くとか
ふざけんな
まじふざけんな
まじふざけんな

すごく心をこめた一句

とある不死身の自動再生　第三話

「あぢいいいいいいい！」

穴が開いた天井から夏の光が入ってきて、恐ろしい暑さになっている。
停電のせいでエアコンが壊れてる上に、壊れてなくても穴があいてるから全く意味が無い。
そんな、サウナのような状態の部屋の中で俺は叫んだ。
なんか最近熱いだの暑いだの言い過ぎな気がする。

いいやそんなことはどうでもいい。
とにかくこの素晴らしく熱い部屋から脱出しなければ……
たらりら～、たらった～♪
「はいもしもし！？」
『……鳴川さん、いきなり変な声出さないでくださいまし』
「ごめんごめん。今ちょっと色々とヤバいからね。で、何？」
『ちょっとしたトラブルですの。水穂機構病院まできてくだいます？』
「そら助かる。病院の中ってのは涼しいからな」
『はい？』
「なんでもない。すぐ行くよ」
助かった。冷房が効いてる病院の中って最高だよな。
俺は腕章をひっつかんで部屋を飛び出した。

急いで病院に行くと、電撃娘――もとい、御坂と白井がソファに座っていた。
なんか暑そうに……って冷房全然効いてねえじゃねえか！
おまけに御坂は寝ていやがるし！

「あら、鳴川さん。来てくれたんですのね」
「お前が来いって言ったんだろ」
「いえ、変な事を言っておられたので来ないんじゃないかと」
「まぁいいや。それで、何の用だ？」
「虚空爆破事件の犯人、介旅初矢ですけど、彼が昏睡したんですの」
「はぁ？　なんでだよ」
「それがわからないから私たちがここにいるんですの。外部からの協力者で来られたという方に意見を聞くために待っているのですが……あら、来ましたわ。お姉様、起きてください」
そう言って白井が御坂を揺さぶる。
だが起きる気配が無い。それを見た白井が怪しい笑いを浮かべて御坂に口付けを……
それ以上見る気がしなくなったので後ろを振り返ると、最近では見慣れた顔がそこにあった。
「おや、鳴川君じゃないか」
「またあんたかい！」
俺がツッコミを入れると同時に、背後で御坂と白井が大声をあげた。
まったく。ここ病院だってことを思い出せよお前ら。

――――

「やたら木山さん見かけると思ってたらこんなところで先生やってたんですか？」

「いや、私はここの病院に招聘されたから最近こっちに来たんだ」

白井達が話を聞く外部の協力者とは木山さんの事だったのか。

確かに、ＡＩＭの研究やってるなら能力者相手のトラブルに適任だろうな。

「ところでお前らは何やってんだ？」

「見てたなら黒子を止めなさいよ！」

「見てるだけの方がおもしれえだろ？」

「なんですってぇ！？」

「まぁまぁお姉様。照れているお姉様もいいですけど、まずこの方に話を聞きませんと……」

「照れてない！」

騒いで夫婦漫才している二人組は置いといて本題に……

なんですか木山さん？

「それにしてもここは暑いな……君もそう思わないか？」
「全くもってそう思う。っていうかなんで夏に冷房入れてないんだよ！」
「そうですわね……」
そう俺が叫び、白井までもが同意した時、近くを通りがかった看護婦さんが言った。
「申し訳ありません。それが昨夜停電があってまだ復旧していないんです」
思えば、俺の家はその停電のせいで吹っ飛んだんだよな。
具体的には屋根が。
……あれ？　木山さん、なんでネクタイに手をかけてるんでせうか？
それをはずして何をするおつもりで？
「そうか。非常用電源は手術や重篤用患者に使われているしな……」
「う゛っ」
「へ？」
「やべ……」
俺達が木山さんの挙動に気付いた時には時遅し。
「ふうぅ……」

木山さんは上半身をキャストオフしていた。

「また始まった……」

「ああ、やっちまった……」

御坂は顔を赤らめて後ずさり、俺は頭に手を当てて上を向いた。

「なな、何をいきなりストリップしてますの！」

さすがは白井、俺達が怯んでいるにもかかわらずしっかり注意した。がんばれ、今のお前は風紀委員として輝いている！

「いや、だって暑いだろう」

「目の前に殿方がいるんですのよ！」

「下着を着けているし、彼ならもう見慣れているんじゃないかと……」

ちょ、おま！

「今何か聞き捨てならないような言葉が聞こえたけどダメです！」

「……そうか」

木山さんこっちにちらりと目を向けないで！

御坂も変態を見るような眼で俺を見るな！

見るなあああああああああ！

俺が頭を抱えてブンブン振っていると、御坂が木山さんに話しかけた。

「木山先生、専門家としてご意見を伺いたいんですが……」

「それはいいが、ここは暑すぎる……」

それは暗に場所を移せってこったろう？

ＯＫ。俺も賛成だ。

「さて、先程の話の続きだが……」

場所を移して涼しいファミレスまで移動しました。

適当にコーヒーでも頼もう。

「同程度の露出でも、何故水着はよくて下着はダメなのか」

「俺としてはつまり――」

「ちょっと黙っててくださいですの」

「すんません」

そしてアイスコーヒーが到着！

「幻想御手（レベルアッパー）……」

俺達の話を聞いた木山さんがそう呟いた。

「それはどういったシステムなんだ？　形状は？　どうやって使う？」

「まだわかりませんの」

「とにかく君達はそれが昏睡した生徒たちと関係しているのではないかと……そう考えてるわけだ」

「はい」

病院に来る途中に聞かされた情報では、他にも何人か昏睡している者はいるそうだ。
おそらくそいつらも幻想御手を使ったのだろう。
そしてそのうち何人かが不自然にレベルが上がっていたと。

「そんな話をなぜ私に？」

「能力を向上させるということは、脳に干渉するシステムである可能性が高いと思われますの。ですから、もし幻想御手が見つかったら、専門家である先生にぜひ調べて頂きたいんですの」

「むしろこちらから協力をお願いしたいね。大脳生理学者として興味がある」

こいつは頼もしい。
昏睡なんて言う物騒な事件はさっさと終わらせるに限るからね。

「ところで、さっきから気になっていたんだが……」

「どーした木山さん？」

シリアスな場面に入れなかった俺が声を出すと、視線を外へと向ける。

それにつられて全員の視線が外に向くと……

「あの子たちは知り合いかね？」

「「「……」」」

なぜか佐天涙子が窓に張り付いていて、そのすぐ後ろに初春がいた。

「へぇ～。脳学者さんなんですか～」

「はっ、白井さんの脳に何か問題が！？」

「幻想御手の件について話をしていましたの」

「あ、それなら……」

「黒子が言うには――」

正直言ってやろうか？

すっげえいずらい。

とてつもなくいずらい。

考えても見ろよ。

女子中学生４人に俺的に綺麗な女性一名の中に俺と言う男が一人。

前に『アイテム』の中に混じった時よりいずれーぞ！
あっちは女四人で一人少ないし、たびたびちょっかい掛けてくるから楽しめるしな！

気まずくてチビチビとアイスコーヒー飲むくらいしかやる事ねえよ！

「あ」

「ああ！　す、すみません！」

俺が窓の外を溜め息吐きながら眺めていると、隣でトラブルがあったようだ。

ちなみにどのように座っているかというと、こんな感じ。

窓窓窓窓窓窓窓□
俺様　机机　白井□
佐天　机机　初春□
木山　机机　御坂□
＝＝＝＝＝＝＝＝□
＝＝＝通路＝＝＝□

俺が窓側の席でまったりコーヒーを飲んでるわけだ。
そして横の佐天が何やら慌ててコップを倒して、木山さんに中身がかかったわけだ。
で、俺はコーヒーを飲みながらそれを横目に眺めてたんだが……

「気にしなくていい。かかったのはストッキングだけだから脱いでしまえば……」

「っ！？　ごほっ！　ごほっ！」

「だーかーらー！　人前で脱いじゃ駄目だと言ってますでしょうが！」

「しかし……起伏に乏しい私の身体を見て劣情を催す男性がいるとは……」

「趣味嗜好は人それぞれですの！　あそこの鳴川さんなんかガン見してますわよ！」

「何……」

「待て！　ガン見はしていない！」

「でもさっきから見ていたのは確かでしょう！」

「否定はしなグッハァ！」

なぜか御坂から電撃パンチが顔面に！

「なんだ……別に彼にそこまでの事をする必要があるとは思えんのだが……」

「あの方はあんなことくらいではなんともないですわ！　それより

！　先程仰っていた鳴川さんが見慣れているとはどういうことですの？」

「蒸し返すんじゃ……ギャアアアア」

「あんたは黙ってなさい。変態」

俺は変態じゃない……電撃を流すのやめてくれ！

「ここ最近彼と会ったときに何度か下着を見せてしまったし……」

「ちょおおおおおっとお待ちください！」

白井はそう言って窓際に追い詰められている俺に向かって突進してきた。

「……今のは本当ですの？」

「いや、確かに本当だが少し話を……」

「あとで固法先輩に言っておきますわね」

「待て！　色々と待て！」

それはヤバイ！　糖分的な意味で！　精神的な意味で！

「鳴川さん」

「ん？」

俺が哀しく窓の外を見て黄昏ていると肩を叩かれた。
佐天か、俺を慰めてくれるのか？
「鳴川さんって意外とやるんですね！」
「だと思ったよチクショウ！」
「ダメですよ佐天さん！　たぶん鳴川さんも悪気はないと思いますよ？　たぶんですけど」
「もっと普通に慰めてくれ！」

「いいですか？　とにかく妄りに服を脱ぐのはおやめになってくださいまし！」
「じゃあ……見せてもいい相手の前ならば別にいいのか……？」
「そうですわね。黒子もお姉様黒子の全てを……っじゃなくて！人の目があるところで脱ぐのはおやめなさいと！」
「鳴川君には別に見せてもダメージはないぞ。彼との会話は興味深く、面白いからね」
「……もういいですわ、好きにしてくださいまし」

「お忙しい中色々と教えて頂き、ありがとうございました」

「いや、こちらこそ。教鞭を振るっていた頃を思い出して、楽しかったな」

「教師をなさってらしたんですか？」

「昔、ね……」

どこか、何かを感じさせる笑みを残して木山さんは去っていった。もう夕方だ。あの人にも世話になったな。

やれやれ。この後、支部に行かなきゃならんのだよな……憂鬱だ。頼むから変な事言うなよ。頼むぞ白井。

「あなたという人は……」

「待て待て待て！　誤解だぞ固法！　俺は何も悪い事なんてしてないぞ！」

「へぇ……それで、女性の下着姿を何度も町中で見たと？」

「いやいや！　だからそれはっ！」

「問答無用よ！」

「いってええええ！」

支部にて追いかけっこをした末に捕まった俺は、固法の放った見事なまでの右ストレートを食らって倒れた。

何回も言ってるけど、傷が治ろうが痛いもんは痛いのである。

神経焼き切れればいいのにとか思っても、治ってしまうから仕方ない。

「あなたは少し女性に対しての態度を改めさせた方がよさそうですね」

「待てよこのりん！　そう怒ったら可愛い顔が台無しだぜ！」

「あっ、あなたはっ、だからそういうことを言うなと……というかですね……」

「やっべ地雷踏んだ？」

「このりんとか変なあだ名つけるなーーー！」

「こんどはアッパーかーーーい！」

もうやだこの支部。

――――

「あー疲れた。すっげえ疲れた」

散々書類整理してやっと俺は解放された。

暗いな……というか、俺の部屋の天井は穴があいてるんだよな……

友人から借りたセリフでも言ってみよう。

「不幸だ……」

とぼとぼと夜道を歩いていると、ちょっと遠くの方が何やら明るい。

これは……

「上条の不幸はついに火事まで巻き起こしたのか」

あいつも大概だよな。

ある意味あの不幸も能力……可哀そうだからやめよう。

明日から本格的にやりますからね～とか言ってたし。

今日は早く寝るか。

麦野も今日くらいは放っといてくれて助かったぜ。

おやすみ～。

第三話（後書き）

あとがき

木山先生にデレを。
むぎのんは今回出番なし。

ちなみに吹寄さんはアンケートからはずしますね。

今のところ

むぎのんが圧倒的人気です。

?固法美偉……黒妻さんの嫁でも、あの手（お前に託す）があるじゃないか！

?麦野沈利……４票

?吹寄制理……第三回につき、書きにくいから敗退

?木山春生……この回のおかげでファンが増えろ。

第四話（前書き）

あばばばばば。

第四話

今日も朝から太陽さんにこんにちは。
いやぁ天井に穴があいてると日光浴もできて大変便利……

「んなわけあるかってんだよ！」

暑くて仕方ないから部屋を飛び出してきてやったわ！
今日からは真面目に幻想御手の調査もしなきゃならんからな。
絶対にこき使われる事になるだろうから、朝っぱらから汗かきたくないんです！

それに昨日、一切連絡を取らなかった麦野にもちょっと聞いてみる事があるし。
この間、『妙にレベルが上がった連中が多くて、そいつらが調子に乗っててうざいんだよね』とか言ってたし。
ちなみに調子に乗って麦野を襲った奴は『文字通り』吹き飛ばされたらしいが。

ともかくあれだ、さっさと支部に行って仕事の分担割り当てでもしてもらいますか。

「幻想御手の取引先？」

『そうですわ。今からリストを送りますからそこに向かってください』

「おいおいリストって……どんだけあるんだよ」

『グダグダ言わないでくださいですの。テレポートがあるからって言っても私の方が数が多いんですから』

「はいはい。わかりましたよ」

俺はそう言ってパタンと携帯電話を閉じる。
相変わらず人遣いの荒い女だ。
ま、たまには真面目にお仕事をやりますかね。

「まずはこれ行ってみるか。地図から見るに……『地下街の廃屋』だっけかな？」

まぁ行ってみればわかるだろ。

さて、来てみたのはいいものの……

「さすがに一発目から当たりはないか」

本当にただの廃墟じゃねえか。
誰もいないし。
さっそくリストにある次の場所に……またはずれそうだな。

この前麦野がレベルが上がった馬鹿が集まっててうざいとか言って

た場所があったっけ。
聞いてみるか。

「もしもし？　鳴川ですけど……」

『ああ、あんたね。いきなり電話かけて来ないでよ』

「ああ、ごめん。この前に馬鹿が集まってて邪魔だって言ってただろ？　その場所について聞きたいんだが……」

『へぇ？　それだけのために掛けてきたわけ？』

「いや、そうなんだけど……」

『ふぅ～ん……』

なんでこいつこんなに不機嫌なの？
どう考えてもおかしいよね？　俺は電話しただけだろ？

「頼む。事件解決につながる事なんだよ。何でも言う事聞くからさ」

出来る限りだけどな。

『別にそういうこと言ってんじゃないんだけどね～。まぁいいわ。今度買い物行くからその時に荷物持ち頼むから』

「そういうことならお安い御用だ」

『約束だからね。それじゃあ言うけど……』

まぁ、荷物持ちくらいなら大丈夫だろう。
ビーム撃たれたりしない限りは。
……よし。『第十五学区の繁華街の裏路地』ね。
なんでお前そんなとこに集まってる奴らがいるとか知ってるんだ？
いや、別にいいけどさ。

「ありがとう、助かった。それじゃあまた今度電話してくれ」

『あ、ちょっと……』

よし。
場所もわかったからさっそく行くぞ。
もう固法と白井に怒られたくないしな。

「ここか……」

実際に教えられた場所に着くと、カラオケとかファミレスとかの建物のすぐ傍だった。
これなら麦野が知っていてもおかしくないだろう。
裏路地に入ると、ガラの悪そうな奴らがゴロゴロといる。
余計な問題を起こしたくないから風紀委員の腕章をはずし、奥へと進む。
そして、『ＢＬＡＣＫ　ＳＰＯＴ』なる店を発見。……何屋だ？
ホテルか？　カラオケか？
……なんか、輪をかけて怪しい。

あと、風紀委員になってから備わった勘的なものが働く。
ちょっと入口に近付いて、入口に立っている不良に話しかけてみる。
こういう時はいきなりカマをかけてみるのが得策だ。
「レベルアッパーをここで貰えると聞いたんだけど……」
ちょっと弱気を演じるのもコツである。
「金は持ってるんだろうな？」
「もちろんです！」
「……今、お前より先に来てる奴がいるから待ちな」
……あっさりビンゴ。
なんだろう。こんなに上手くいっていいんだろうか。
まぁいいか。
とっとと片付けちまおう。
俺は懐から腕章を取り出して言った。
「風紀委員だ。幻想御手の事について『オハナシ』させてもらうぜ？」
「んなっ……」
「気絶してろ！」
叫ぼうとした見張りの不良Ａの顎をぶん殴って気絶させる。
……よし、これで中にはバレないよな。

いや、バレてもいくんだけど。

とにかく侵入開始だ。

入り口を通って階段を下りていくと、また門番っぽいのを発見。
能力らしい能力を使う前にぶん殴って気絶させる。
やっぱり能力者相手には不意打ちが一番である。
相手が何の能力かわからん上に、レベルも上がってるかもしれない
とあったら、いくら警戒し過ぎてもし過ぎることはないだろう。

さて……それではご入場と行きますか。

「へ……へへっ！　これで俺も能力者に……」

（うわ、怪し過ぎるだろ）

音楽プレーヤーからイヤホンを伸ばして耳にはめながら呟く不良。
なんというかすごく怪し過ぎる。

というか、音楽プレーヤー？

まぁいい。

「風紀委員（ジャッジメント）だ。お前ら、幻想御手の事について詳しく聞かせてもらうぜ！」

「あぁ？」

突然乱入した俺にその場にいた全員の視線が集中した。今のところ数は五人。

そして笑い声が巻き起こり、一人が話しかけてきた。

「うひゃはははは！　てめえ一人で来るとか頭大丈夫かよ！」

「そう思うか？　なら攻撃して見ろよ。遠慮なしに本気でな」

「ああやってやるよ！　幻想御手で俺は能力者になったんだ！　もう風紀委員になんて従わねえ！　喰らいやがれ！」

そう叫んだ男は俺に向かって『何か』を飛ばしてきた。

そしてその『何か』が当たった場所がバシュッと切れる。

カマイタチ的な何かだろう。

「ひゃはははは！　死んじまえ！」

「これくらいじゃ～死なないな」

「ああ！？　なっ、なんだとっ！？」

切れた傷口がスウッと消える。

ちょいとばかし服に血がついたけど問題ない。

相手が大勢で、自分が不利な状況なら、それを恐怖を与える事でカバーする。

「俺は死なないんだよ。そら、もっとやってみろ。てめぇらで俺を

殺してみろよ」

「くそっ！　おい、お前らもやれ！」

「わっ、わかったっ！　そらっ！」

壁にかかっていた刃物、机に置かれていた刃物が俺に向かって殺到して突き刺さる。

念動力か。だが、突きさされるくらいじゃ俺は止まらないぞ。

血が体中の刺さった部分から噴き出しながらも、一番近くにいた不良に向かって歩いていく。

「そら、全然殺せていないぞ？　もっと頑張れよ」

「くっそおおおおお！　ぶはっ！」

近くの一人を殴り飛ばして意識を奪う。

恐怖と混乱で演算が鈍れば、いくら能力があっても本来の力で使えないのだ。

「そら、俺を殺れるもんなら殺ってみろよ」

「うわあああああああ！」

一人が意識を失う事で他の奴らも正常な判断力を失いかけている。

そのまま巨大な氷柱を飛ばしてきたが、腹に突き刺さったものをそのままに近付いて殴り飛ばす。

「無駄だぜ」

「どうしろってんだよクソったれが！」

「俺が知るかよ」

まぁ、幻想御手なんてものに手を出した自分を恨みな。

「君っ！　そんなに血だらけで……すぐ救急車を！」

「あ～いや、気にしないでくださいよ。怪我はしてないから」

「いや、だが……」

「俺は能力者だから気にしなくていいですから」

俺は駆けつけた警備員（アンチスキル）に、残された血痕の事をなんとか説明し終えた。

実際、かなり不気味だしな。誰も怪我してないのに血痕が残ってたら。

俺が血まみれなのもあるけど。

警備員を呼んで彼らが来るまでの間に、残ってた一人に聞きだした結果。

あの音楽プレイヤーに入っている曲が幻想御手で間違いないらしい。

それが判明して警備員も来たから、さぁ風紀委員の支部に戻ろうと

したところで、倒れていた男たちが一斉に喋り出した。

「大丈夫だ・・・俺達は負けない」

「ん？」

「やれやれ、こいつもか」

じっと男の言っていることを聞いていると不意に警備員（アンチスキル）の男が呆れたように言った。

「こいつも、だと？」

「ああ。犯罪を犯した能力者の中にこういうことを口走る輩が増えているんだよ」

「……そうか」

これも事件に関係ある事なのか？

ともかく、何はともあれ支部に戻ろう。

話はそれからだ。

……一応、服を着替えてからいこう。

「ただいま～」

「ああ、ちょうどいいところに帰ってきましたわね」

「は？」

「また学生が暴れているらしいんですの。あなたも来てくださいな」
「ちょ、俺今帰ってきたばかり――」
「問答無用ですわ！　普段だらけてるんですからこういう時くらい働いてください！」
「そんな理不尽な！」

その後、頑張ったはずの俺はまた働きに出された。
白井がいるせいで逃げる事も出来やしない。
テレポート持ちが監視役をするとかふざけんじゃねえ。
おまけに幻想御手もすでに白井が入手済み。
骨折れ損のくたびれ儲けとはこのことか。
友よ、今日もお前のセリフを使わせてもらおう。
「不幸だーーー！」

そして数時間後、やっとこさ家に帰れた。
でも、明日もまた呼び出される事が確定してるとつらいな。
ハァ……ま、諦めてるさ。

うん。今日は飯食ったら早く寝よう。

第四話（後書き）

あとがき

２１日目。

さて、そのうち展開が変わるぞ。

第五話（前書き）

いろいろときな臭くなってきました。
メインヒロインは麦野で、サブヒロインはそこそこです。
ハーレムじゃないです。
２４日までは適当に不良の鎮圧編含めてフラグ立てだな。
やれやれだぜ。

第五話

――7月22日

なんでも、レベルアッパーの事件が解決するまではしばらくスキルアウト狩りをしなきゃならないらしい。
朝起きるなり固法からそんな感じの電話が来て、俺はすぐに風紀委員の支部へと向かった。
正直言って寝起きで電話を聞いたからかなり不機嫌なんだが、どうやら俺の意見は無視されるようだ。
せめて固法が電話越しで大声出さずに起こしてくれれば……
彼女がいればモーニングコールとかあるんだろうか。アホらしいこと考えたな。やめよう。

「ちょっと、話聞いてる？」

「へいへい。聞いてますよ」

しぶしぶといった表情の俺に起こった様子で固法が話しかける。
説明してる最中に俺が露骨に嫌な顔したからって文句言わないでくれ、俺だって不機嫌なんだから仕方ないじゃないか。
昨日も町中駆けまわったって言うのに今日もだぜ？
おいマジかふざけんな、とか言い出さないだけ偉いと思うんだが。

「それじゃあ鳴川も、お仕事お願いね」

「わーってるよ」

「……サボらないように」

「いちいち言うんじゃねえよ！」

お前は俺の母さんか！

心の中でそう叫んで俺は支部を後にした。

ドアの前で文句を言おうにも、あのスケスケ眼鏡相手じゃオチオチそんな事も出来ない。

透視能力云々より前に地獄耳だからな。

……まぁ、街をぶらつきながら連絡があったら鎮圧に向かうって事でいいだろう。

そんなこんなでブラブラと――

「レベルアッパーでオレは力を――」

「黙れ！」

街中をアイス食べながらブラブラと――

「ヒャッハー！　燃え――」

「アイスが溶けただろチクショウ！」

ブラブラと――

「俺は風紀委員をぶっこ――」

「多すぎだコラアアアア！」

ひっきりなしに電話がかかり、ひっきりなしに事件が起こる。
いや、そんなに事件が起こってるわけないから俺が不幸なだけなのかもしれないが。
もうイヤになった俺は近くのファミレスに避難することにした。

「あ」

「お、鳴川じゃん」

「ひさしぶり」

「超ひさしぶりですね」

「鳴川、また何か奢ってね」

で、たまたまアイテムの面々が勢ぞろいしてました。
じゃなくて！

「なんか奢る前提か俺は！？」

「結局、そういう風に見られてるからしかたない訳よ」

「今までホイホイ奢ってきたのが仇となったか……」

くそう、アイテム連中の財布じゃねーぞ俺は！

「どんまい鳴川」

「滝壺は何も――」

「あたしもケーキ頼んでいい？」

「ああうん。もう何も言わない」

回りは全員敵か！

麦野と絹旗？　初めから期待してないから。

そういう優しい対応とかは全然期待してないから。

「で、鳴川は何やってたわけ？」

「ここにきた時は超不機嫌そうな顔でしたけど」

麦野と絹旗がそう聞いてきたので、仕方なく答えることにする。

どうでもいいけど、ジュース飲んだりケーキ食いながら話し聞いてくるのはやめてほしい。

「今、スキルアウト連中の間で『幻想御手』ってのが出回っててな。それで能力を得て暴走する連中が増えてるんだよ」

「ああ、鳴川がこの前電話してきたのはそれが原因か」

「そうだよ麦野。スキルアウトが騒がしくて皆困ってるのさ」

「でもそれだけならたいした問題ではないと思いますが……何か副

作用でも？」

「使った奴は片っ端から昏睡状態だとさ……フレンダ、ちょっと使いたいとか思わなかったろうな」

「いやいや、別にそんなこと欠片も思ってないから」

……怪しいが、まぁ昏睡するってわかってるものを一々使うほどバカじゃあるまい。

「副作用がなければ使うのにな……」

「……そうね。滝壺に使えれば役立ったのに」

「超役立たずですね、鳴川」

「俺、全然悪いことしてねえよな？　むしろ『幻想御手』の副作用の有無を俺に文句言われても仕方ないんだが？」

「そこらへんは結局、鳴川の役割じゃない？」

そんな損な役割いらんわ！

と、ちょうどそこで携帯電話が鳴った。

次の『幻想御手』使用者が起こした事件のメールが来たようだ。

「また仕事だ。つーわけで俺は行くよ」

「お代はよろしく」

「……麦野、頼むから今度なんか奢ってくれ。割に合わん」

麦野に対してお願いしてみる。
たぶんこいつが一番金持ちだからな。
結構切実な問題だから真面目な顔で頼んでみた。
……まぁこんなことしてもこいつが奢ってくれるわけ――

「はいはい。じゃあ今度奢ってあげるわよ。その代わり、買い物に付き合ってね」

「お？　……おう。わかった」

なんかやけに素直にお願いを聞いてくれた。
……こいつ、風邪でもひいてるんじゃなかろうか。
そんなこと考えながら麦野のほうを見てると、さすがに気になったようで話しかけてきた。

「何？　仕事あるならさっさと行ったほうがいいんじゃないの？」

「確かにそうだな」

麦野が不機嫌になっちまう前に去るとしよう。
せっかく奢ってもらう約束を取り付けたのに、パアになったらしゃれにならないからな。

「それじゃ、またな」

「ごちそうさーん」

「また会いましょう」

「またね」

アイテムの連中も結構いい奴だからまたファミレスで食事したいものだ。
その時は俺の奢りじゃないことが条件だが。
さて、メールによれば走って5分位のところで事件が発生か。
面倒だけどがんばるかね。

＝＝＝

「……ったく。あいつも仕事なんか無視してもう少しここにいればいいのに」

そんなことを呟く麦野に気付かれないよう、残りの三人は目配せをした。

（へぇ）

（これは……）

（超確実に……）

（デレたね）（デレてる訳ね）（デレですね）

果たしてその発言が本当に麦野に聞こえていないかは麦野しか知らない。

「ん～いつごろあいつと買い物行くかな～最近は仕事もないし、い

つでもいいんだけどね～」

アイテムの面々には、その日の麦野がなんだかご機嫌そうに見えたとか何とか。

＝＝＝

アイテムの面々と別れた俺は、事件を鎮圧した後また街をぶらついていた。

別にさっきのファミレスに戻ってもいいんだけど、これ以上散財したくない。

あそこにいると更に搾り取られそうな気がするからな。

そんなわけで、だんだんと夕日が差しはじめている中をぶらぶらとうろつく。

正直言って無駄に時間を使いまくっている気がするが、学校だってもう夏休みだし、能力開発に必死になってるわけでもないし、問題ないだろう。

……あんみつでも食べに行くかな。腹減ったし。

家の買い置きあんみつセットも無くなりそうだったし、黒蜜堂にでも出かけるかね。

「うむ。補充完了だな」

黒蜜堂でしっかりと1週間分のあんみつセットを買って、ついでに

ケーキを食った俺は家に向かって歩き始めた。
さっさと帰って冷蔵庫に入れないとだめになるからな。
しかしいつもはこういうところで大抵邪魔が入るんだよな。
前は風紀委員のみんなと遭遇して分け合うこともあったし、アイテムの連中と遭遇して分け合うこともあったし、上条の不幸に巻き込まれてスキルアウト連中に追いかけられて中身がグチャグチャになったこともあったし。

まぁ今回は何事も無い様で一安心……とはいかないようで。

「どうにも運が悪いというのか……それともトラブル体質なのか
まぁ、知り合いを見かけたら話しかけるのが常識だよな。
……そんな常識あったっけ？　まぁいいや。

「おい電げ……この場合はあんみつが危険だな。御坂？　そんなとこで何やってるんだ？」

帰り道にいたのは、缶詰を食らう猫の前に座り込んでいる御坂だった。
俺が声をかけると黙ってこちらを向いた。
……ん？　なんか予想してた反応と違うな。
いつもどおりの常盤台の制服着てるし、顔も結構見慣れてるから御坂で間違いないはずだが。

「あなたは誰でしょうか、とミサカは問いかけます」

「……お前、そんなヘンテコリンな喋り方する奴だっけ？　それとも新しく思いついた遊びかなんかか？」

それとも罰ゲームとか。
あの白黒あたりなら考え付きそうだけど。

「ミサカは元々この話し方です、と初対面のあなたに告げます」

「いやいや初対面じゃねーだろ。何度も雷みたいな電撃を食らわしてくれただろうが」

「いいえ初対面ですとミサカは答えます。そしてそのような電撃を受ければ普通は死んでいるはずですと、ミサカは大げさに言っているのだろうと思いつつ問いかけます」

「いやいや、だって俺不死身だし」

「？」

なんでそこで首を傾げるんだ？
俺が不死身なんて事御坂だって知ってるだろうに。

「もしかしてマジでそっくりさんなのか！？」

「そっくりというのはお姉様の事ですか？と御坂は尋ねます」

「お姉様？」

白黒が御坂に言ってるのとは別の意味だろうから……
双子の妹か！？　こんなにそっくりって事はそういうことなのか！？
いやでも妹いたとか聞いたことないしな。いたら白黒ももっと騒ぐだろうし。

「お前、もしかして御坂の妹？　もしくは親戚？」
「お姉さまと血が繋がっているのは確かです、とミサカは答えます」
「……へ～え。あの電撃女に妹がいたのか。そいつは全然知らなかった。ところで何やってるんだ？」
「猫に餌をあげています、とミサカは見てわからないのかと思いつつ答えます」
なんか口悪くないかこいつ。
まぁ御坂姉（仮）の方もかなり口が悪いからな。これも血か。
しみじみとそんなことを思いつつ、猫のほうを見てみる。
缶詰を食い終わって、白に黒い斑の猫がこちらをじっと見ていた。
そんな猫を御坂妹（仮）が撫でようとしたのか、手を近づけて――
「あ……」
「恩知らずな奴だな～」
そのまま猫は逃げ出していってしまった。
猫は路地へと入ってすぐに見えなくなった。
御坂妹（仮）は猫が消えていったほうをじっと見つめている。
「なぁ、猫とか好きなのか？」
「……」
無視ですかそうですか。
そういう風にやたら黄昏てるの見てるとどうにもやるせなくなるん

だが。
俺は全く関係ないはずなんだけど、そういう性分だから仕方ないというか。
「おい御坂妹、今度猫が大量にいるところに連れて行ってやるよ」
「急にそんなことを言ってくるあなたの名前を聞いていません、とミサカは不審に思いつつ問いかけます」
「……そういや名前言ってなかったっけな。お前のお姉さまとやらの知り合いの鳴川昴だ」
「……鳴川ですか」
「何か問題でもあるか？」
「いいえ、何も問題ありませんとミサカは答えます」
なんか前に似た反応を見たな。
俺の名前なんてのはそれこそ一部の人間しか反応しないと思うんだけど。
まぁそれはいい。
猫が食っていた缶詰を袋に入れて、今にもどこかに立ち去ろうとする御坂妹に俺は話しかける。
「おい、これ一個だけやるから元気出せよ」
「これはなんですか？　とミサカは興味を抱きながら問いかけます」
「黒蜜堂で買ったあんみつだ。一週間セットなんだが、どうにも哀

れだから一個やろう」

「……ありがとうございます、とミサカは感謝を示します」

「今度猫がたくさんいる場所連れてってやるから、お前のお姉さまにでも言っといてくれ」

「……」

まぁ、無視されたかと思ったけど頷いてるからよしとしよう。

さーて。明日も忙しいから帰るかな。

（あの人が量産型能力者（レディオノイズ）計画の前身となった計画のオリジナルですか）

（あんみつ、これはおいしいですね）

（猫がたくさんいる場所ですか。お姉さまに伝えることはできませんね）

（時間ですか。……行きましょう）

第五話（後書き）

あとがき

早く主人公の過去編とか麦野との出会い編とか書きたい。
伏線とか立ててるけどちゃんと回収するからな？

第六話（前書き）

遅くなってすいません。
閑話なので短いです。

第六話

7月23日

今日も今日とて俺は町を出歩いていた。
まぁ、幻想御手事件が終わるまでは続けなきゃならんのだが……はぁ。
ともかく、あれだ。

「暑い！」

さっき買ったアイスはとっくに食っちまったし。
現在持っている缶ジュースでは戦力不足を感じるわけだ。

「んぐ、んぐ、んぐ……ぶはぁ～。もう空かよ。そりゃっ！」

一気に飲み干してゴミ箱に向かって思い切り投げつけた。
よし、ナイスショット！
……はぁ。
なんか空元気も虚しくなってきた。
ちょうど電話もかかってきたし、お仕事しますかね。

今日のお相手は念動力に発火能力に発電能力か。

……うんまぁ、服が燃えなかったからそれでいいや。

にしても昨日のアレはなんだったのか。
御坂にやたらそっくりな妹さんだったが。
……ま、また会えるだろ。

さて。今日の仕事は一段落……といったところだ。
時間が結構余ってるので近くのスーパーに買出しに行くことにする。
で、またこの人と会ったわけだ。

「あ」

「やぁ。また会ったね、少年」

木山さんか。
……というかタイムセールに来てたのか？　この人。
そんなの気にする人に見えないが……手にビニール袋を持っている
ということはそうなんだろう。

「というか自分で料理するんですか？」

「いや、今日は偶然だな。本来なら栄養食品を取って終わらせている」

……そんなんだからいっつもだるそうな感じが抜けないんだと思うけど。
いやまぁ人の勝手だから知らんけどな。

そんなことを考えていたら、いつの間にかこっちを向いていた木山さんに話しかけられた。

「なぁ少年」

「なんだい木山さん。そんなシリアスっぽい雰囲気出そうとしても、手に持つ袋で台無しだぜ」

「？　いや、ちょっと話をしたいから一緒に来てくれないかと……なんで俯くんだ？」

「なんとなくだ。……気にしないでくれ」

せっかくのツッコミに気付いてもらえないのは辛い。
いやまぁ、ある程度予測できてたけどさ。
ところで話があるから来てくれだって？

「車で来ているんだよ。ちょっとついてきてくれないか？」

「別に今日の仕事は終わってるからね。別にいいさ」

軽く頷いて、背を向けて歩き始めた木山さんの後を追う。
どんな話が待っているのか知らないが、とりあえず暇つぶしにはなるだろう。
そんな軽い気持ちで俺はそう決めたのだ。

＝＝＝

「コーヒーを入れるよ。そこに座って待っていてくれないか」

「了解でーす」

俺は車に乗せられて、木山さんの研究所までやってきた。
……化学薬品扱うような部署じゃないから、料理とかもいいんだろう。たぶん。
普段は栄養食品だって言ってたし。

木山さんがコーヒーを持ってくるまでの間、ソファに座って窓の外を眺める。
いつもどおりの代わり映えしない街の風景だ。
木山さんからは一体何の話をされることやら。

「やぁ、待たせたね」

「いーやいや、待ちに待ってただけだから問題ねーぞ」

「そうか。ほら、コーヒーだよ」

「どーも」

コーヒーを手渡されてカップの端に口をつけて傾ける。
インスタントっぽいけどまぁ美味いんじゃなかろうか。
……苦いのは大嫌いだが、砂糖を入れてくれてあったようで助かったぜ。

「そいで、一体どういったお話で？」

「ああいや。たいした話じゃないんだよ。調べ物をしていたらこんな物が出てきてね」

「？」

木山さんがコーヒーを飲みながら机を挟んだ向かいのソファに座り、机の上に何らかの書類を置いた。

俺は多少疑問に思いながらそれを手に持った。

書類の内容は……ッ！？

「これは……なんで！？」

「調べさせてもらったが……既に凍結済みだったからかな。そこまで隠されているモノでは無かったよ」

「……」

そこに書かれていたのは、俺がまだ黄泉川に拾われる前の頃の研究の事だった。

何度も何度も殺されて実験されつくされていた頃の――

遠い――記憶だ。

「これを見せて、何がしたかったんだ？」

「いや。君も被害者だと言うことを知って……一番は次の実験のことを知ったからかな」

「……次？」

俺は確かに色々な研究所をタライ回しにされた時期もあった。
そのうちのどれか一つが木山さんの目に止まったということだろう

「再生可能な君の体から、どのような患者に対しても適応可能な臓器を作り出す実験の事だが――」

「待て！」

「……どうしたんだい？」

「……いや、続けてくれ」

俺はバクバクと鳴る心臓を無理矢理落ち着かせて口を開いた。
俺の知ってる実験には、そんなモノは無かったはずだ。
だとすれば、考えたくないが、俺がいなくなっても実験は続けられていた？
だとしてもどうやって――？

「その実験では臓器だけではなく脳の治療関連についても行われていたらしいが……」

「そうらしいな。このデータ見る限りは」

確かにそういったことは書かれていた。
俺がいなければそんな実験できるはずも無く……だいたい。
書類には書かれていないことだが、俺が何度も殺されていた実験は十分に非人道的だった。
木山さんも、さっき渡した過去の実験資料の内容が偽造されていなければこんなことを俺に聞きはしないだろう。

「でも、こんなものは当てにならないよ。俺に聞いたところでどうしようもない」

「――何故だか聞いてもいいかな？」

「そりゃあ、さ。このデータに書いてあるとおりなら可能性もあるのかもしれない」

「なら何故……っ！？」

尚も聞いてくる木山さんの目の前に書類を突き出す。
俺に向かって机に乗り出していた木山さんが、ソファに深く座り直したのを確認してから続きを話すために口を開いた。

「こんなもん嘘っぱちだよ。ほとんどがな」

「そんな……いや、予測はしていたが……」

「臓器はわかる。まだな。でも、脳に関してはまだ無理だ。脳の一部だけ取り替えるのも、丸ごと取り替えるのも、無理に決まってる。ましてや能力開発を受けた脳なんだ。適応されるはずがない」

……まぁ、俺の脳は来たときから何にも変わっちゃいないんだけどな。
改造されても、された端から元に戻るんだからしょうがない。
それに、開発云々以前にだ。
俺の脳の複製を作ると言うことは、俺から脳を抜き取るということだ。
能力の発現が脳を中心にするというのなら、抜き取った脳の方で俺が復活するだろう。

――まぁ、頭を吹っ飛ばされてもなぜか生きている俺が言っても意味の無いことだが。

俺は、自分の能力の事すら全くわかっていないのだ。

「とにかく、何が目的で聞いてきたか知らないけどさ。そんなものは一切関わらない方が身のためだよ」

「そう……か。すまなかったね」

「何が？」

「嫌なことを思い出させてしまったのではと思ってね」

本当にすまないと思っていそうな顔でそう告げる木山さん。

……はぁ。別にそこまで気にする必要も無いんだが。

今となっては過ぎたことなわけだし。

「まぁ気にしないでください。でも、どうしてそんなこと持ち出したのか位は聞かせてもらえますか？」

「はは……そうだね。ちょっと、助けなきゃいけない子たちがいるんだよ」

「――無責任な事しか言えないけど、頑張ってくださいね」

「もちろんだよ。その為に私は、今まで進んで来れたんだからね」

苦笑を浮かべる木山さんがこちらを見る。
なんだ。俺が実験の事を全否定したから落ち込むかと思ったら、全くその様子の欠片もない。
やっぱりこの人は強いね。
あの頃の俺と比べるのもなんだが、そんな俺よりもずっと強いのは羨ましいね……全く。

「とりあえず帰っていいですか？　明日も忙しくなりそうだし」

「ああ。送っていくよ」

「あ～、大丈夫だから気にしないでいいっすよ。木山さんはその子達を助けるために頑張ってください」

「……ああ。君にも迷惑をかけたかな」

「気にしないでいいってのに」

それじゃあと手をあげ、俺は部屋から出ることにした。
ただ、気になるのはあの研究書のことだ。
どこから入手したのかはともかく、あの内容は……
俺と同じ能力を持った奴がいないと実験はできないはずだ。
なのに一体どうして実験が続けられていたのか。
中途半端な部分で終わっているというのが、実験を途中で終わらせたことに何か関わりがあるはずなのだが……

――今考えても仕方ないか。
家に帰ってあんみつでも食べよう。

第六話（後書き）

あとがき

起こり得ない偶然があり、
それを起こした必然があるなら、
それはもはや超能力である。
・・・ピスケー。

さてさて今回は短かったけど、いよいよ次くらいから幻想御手事件もクライマックス！
お楽しみにな！

第七話（前書き）

幻想御手編もいよいよ終幕・・・ラストスパートの前編を見よ！

第七話

7月二十四日。

今日もかなーり暑い一日で、俺は白井は別に風紀委員の仕事に従事していた。

急激にレベルの上がった連中が多いせいで激務となり、疲れも溜まって能力低下。そこから怪我に繋がる風紀委員も多い中、俺はなんて仕事熱心なんだろう。

まぁ、疲れてようがなんだろうが怪我が治っちまうだけなんだが。

それでも痛いもんは痛いんだから頑張ってるのを評価して欲しいよな。

「白井も傷だらけになってたし、あれだけ便利な能力もっててもあーなるんだから俺の事にも気を使ってくれればいいのにな～」

やたらと張り切りすぎるのも怪我する要因ではあると思うけどさ。

幻想御手が見つかっても原理が解明できてないみたいだし、いつになったら事件は解決するのやら。

音声ファイルをネットに流しただけだから犯人も見つからないし。

……ま、俺がそんな専門的な事わかるわけないんだけども。

「っと、携帯が……」

ポケットの中で鳴り出した携帯を取り出して誰からの電話か確認す

る。
どうやら白井からのようだ。
「はいこちら鳴川、できれば休暇を要求――」
『ふざけてる場合じゃありませんの！』
「んぉっ！？　いきなり大声を出すなと……どうした？」
『佐天さんが倒れましたの！』
「――何ぃ！？」
思わず俺も大声を出して携帯にかじりついた。
この状況で倒れたとか聞くと、原因も一つしか思い浮かばないんだから当然だ。
「幻想御手か！？」
『そうですの！　今、私はお姉様と一緒に病院にいます。あなたは木山先生のところへ向かってください！』
「初春はどうした？」
『もう木山先生のところに向かってます。あなたも合流してくださいですの』
「了解。全速力で向かう！」
なんか知らない間に大変なことになってるようだ。

とにかく、携帯をポケットに突っ込んだ俺は急いで走り出した。
目指すのは、前に招待された木山さんの研究所だ。
あの人自体、結構いろいろな隠し事してそうなんだよな。

まぁいいさ。とにかく今は初春と合流しよう。
位置的には多分バスとか使うよりも走ったほうが早くつくだろう。

全速力で汗を掻きつつ走り抜き、やっとついたかと思った時だった。
なにやら見覚えのあるスポーツカーが、視界の端っこを走っていった。

「え？」

思わず声を上げてそちらを見る。
見る。
見る。
よし、見た。

「ふっざけんじゃ……ねぇ」

思わずその場に崩れ落ちそうになった。
つーかアレ木山さんの車じゃねーかどういうことだよクソ……
何だこの入れ違い、せっかく走ったってのにぃ。

骨折り損のくたびれもうけ……ん、また携帯か。

「はいもしもし！　今俺はちょっと機嫌が悪――」

『そんなことどうでもいいんですの！』

「耳元で怒鳴るな！」

白井の声が携帯を通して耳に響く。

鼓膜破れるぞオイ、いや破れても治るんだけど。

『いいから聞きなさいですの！　幻想御手を開発してバラまいていた犯人がわかりましたの！』

「おお、そりゃよかったじゃねえか」

『よくありません！　木山です！　木山春生が犯人なんですの！』

「……なんだって！？」

あの木山さんが！？　調査に回ってた張本人じゃねえか！

だから今まで犯人が見つからなかったのか？　にしても何で急に？

というか初春が木山さんとこに行ってるんだよな……さっきの車って、まさかな。

『とにかく！　あなたも急いで木山の所に――』

「よっしゃ了解！」

『あ、ちょっとお待ちな――』

なんか聞こえてたけど無視して携帯を切ってポケットに突っ込む。

つまりは木山さんはさっきの車で逃げちまったって事だろうが。

んならこんなとこでいつまでも電話してるわけにもいかねぇよなぁ！

あの人にどんな理由があってやったのかは知らんが、話を聞くにもとりあえずは止めてからだ。

「とりあえず足の確保は……あれでいいか」

明らかに違法改造した感じのバイクを道端に止めているバカがいる。幻想御手事件で、最近風紀委員もゴタゴタしてるからな……まぁラッキーだと思えばいいか。免許は無いが……なんとかなるだろ。

で、そうこうしてる間に車を見失ったわけだが。

「つーかあの人に聞きゃいいだけじゃねーか俺。先回りしてやる……もしもし？」

『昴か、今忙しいから後にするじゃん！』

「俺も風紀委員の仕事があるんだよ！　真面目に仕事してるんだから情報提供くらい頼むって！」

『今忙しい……ってことは木山春生の件じゃん？』

バイクを突っ走らせて車を追いかけていたんだが、いつの間にか見失っていた。だって仕方ない。運転に慣れてないから街中じゃスピード出せないんだから。

そんな訳で仕方なく自分の保護者に聞くことにしたわけだ。
警備員（アンチスキル）だからこの事件にも借り出されてるはずだしな。

「で、どこで張ってるかわかる？　監視カメラとか色々あるんだろ？」

『あったり前じゃん。今から場所を言うから……』

やっぱり場所も割れてるようだ。
警備員は頼りになるね。俺が風紀委員になった原因はあの人にあるけど、今回は逆に感謝だな。
さて、場所もわかったし急ぐとしますか。

「ありがとうございまーす！　そいじゃそういうことで！」

『ちょ……』

なんか言いかけてた気がするけど、あっちに行ったら直接聞けるだろう。
微妙にデジャヴだが、とっとと動き始めるに越したことは無い。
さ～て。ちょいとばかりスピード上げて行きますかぁ！
俺はアクセルを思い切りひねってグンと加速して走り出した。

目指すは既に警備員が封鎖している地点Ｂ（仮名称）！
レッツラゴーだぜヒャッハー！

＝＝＝

テンション上げ上げのまま、鳴川は道路をバイクで駆ける。
教えられた場所はもうすぐそこだ。
もうしばらく道なりに走り続けるだけで、木山が通行止めにあっている場所に着くだろう。

しかし鳴川は異常に気付いた。

自分が今向かっているそこから、やたらと土煙があがっている。
鳴川は疑問を頭の中に浮かべながら更にバイクのスピードを上昇させた。
問題など起きるはずが無い。
警備員は多少の能力者が相手でも取り押さえてみせるだろうし、ましてや木山春生は能力者ではないのだ。
いくら初春と一緒にいて、もしも彼女を人質にしたとしても、土煙など上がるはずが無い。

「嫌な予感がするな……」

しかし現に問題は起きてしまっているのだ。
既に起きてしまっている以上、それに立ち向かわなければならないだろう。
警備員の駐屯していた場所がそうなっている以上は、それだけの大きな事が起きたのだ。

そして、鳴川はそのまま数分走り続けて目的地へと辿り着いた。
そこは予想していたモノを越える惨状となっていた。

「なんだ……これ……」

その場所についてバイクを止め、鳴川は呟いた。
警備員が全滅し、車はひっくり返り、近くの風車すらもへし折れている。
そして土煙の中、惨状の中心にただ一人立っている木山春生がいた。

「……おや、少年も来てしまったのか」

「も？」

「ちょっと、あんたも来たの！？　黒子が連絡が取れないって……」

「んだよ来ちゃ悪いか！」

鳴川が声のする方に顔を向ければ、木山春生の乗っていた車の傍に立つ御坂美琴がいた。
御坂が覗き込んでいた車の中には、木山にここまで連れてこられたらしい初春の姿もある。
車の中の初春は気を失っているが、別段何かされた様子も無い。

「彼女には先ほども言ったが、初春君は戦闘の余波を受けて気絶しているだけだ。命に別状は無いよ」

「別に、初春に木山さんがなんかするとは思ってないさ」

「君の信頼を裏切ってしまったかな？　幻想御手事件の犯人は間違いなく私だが」

「さぁ？　俺は自分が他人を信頼し続けてるのなんかわからないしな。自然と行動にでも現れるさ」

鳴川は軽く首を振って、木山の言葉を肯定も否定もしない。
しかし木山には、こうやって時間を潰す時間はそんなに無い。
そしてこの場にはもう一人、黙って見ているままですむはずの無い少女がいた。

「あんた、無駄なこと話してないで木山を止めるわよ！　こっちは黒子にも啖呵切っちゃったの！　それにあんたも風起委員の端くれでしょ！」

「んなこたわかってるよ。舐めんな電撃娘。俺だって風紀委員でレベル5だ。そっちこそ足手まといにならんよーにな」

いつまでも話を続ける鳴川に、御坂がさっさとしろと催促を飛ばす。
しかし鳴川とて風紀委員だ。締めるべきところはしっかりと理解している。

「……君達は本当に元気だな。しかし、こうしていつまでも時間を潰されるわけにもいかないんだ」

木山を止めようと身構える二人に、木山も二人に体を向ける。
そんな木山を見た鳴川は素早く前に出ていつでも動けるように体勢を整える。
それは風紀委員での訓練の成果でも、自らの能力の特性上身についた行為でもある。

「時間なんかいくらでも潰してやるさ。そのままここで止めて事情はたっぷり聞かせてもらう」

「ちょっと、あんたが前に出ると――」

「いいんだよ。俺なんか勝手に盾代わりにでもすりゃあいい。これでも自分の一番いい使い方はわかってるんでね」

鳴川は啖呵を切りつつ、背後の御坂の文句に答えていく。
自分が不死身である以上、それを最大限に生かした情報収集のための囮にでも身を守るための盾にでも使えばいいのだと。
特に今回、木山春生がどれほどの力を持っているかわからない以上は特に。

「いくらレベル5の君達でも、私のような相手と戦ったことはあるまい。君達に、一万の脳を統べる私を止められるかな？」

「あんたを止める為に、俺はここにいるんだよ！」

「当たり前でしょ！　絶対に止めてみせる！」

木山が挑発するように零した言葉に、二人は激しく反応した。
そしてその勢いを保ったままで、彼らは木山へ向かって走り出した。

学園都市第二位、『超電磁砲』の御坂美琴。
学園都市番外位、『自動再生』の鳴川昴。
それに対するは一万の脳を統べる『多才能力者』となった木山春生。

幻想御手事件の終幕が近づいていた。

第七話（後書き）

あとがき

やっと幻想御手編も終わるのう・・・
そうすればオリジナル展開も出せそうでござる。

むぎのんだけでなく、ミサカ妹に会ってるのも微妙なフラグ。
いえ、メインヒロインはもうむぎのんですから恋愛フラグってわけじゃないんだが。

第八話（前書き）

秘密兵器も登場です。

第八話

目の前の木山さんに向かって走り出しながら、俺は後ろの御坂に声をかけた。
振り向きざまに適当になんか言ってやろうと思ったわけだ。景気づけに。

「心してついてこいよ御坂！　俺は『命の危険を顧みず』なんて知らないからな！」

「うっさいわね！　前見なさい前！」

「前！？」

言われて前へと向き直る。
と、そこには腕を振り下ろした木山さん。そして同時に見覚えのある巨大な火柱が。

「うわぁお！？」

俺は右手を前に出して炎にぶつけた。
肉の焦げる音と匂いがするし腕の燃える感覚がするが、それでも炎は俺で止まる。
突き出した腕を中心として炎が拡散し、俺の体という壁で止めたのだ。

「くらいなさいっ！」

同時に、俺の後ろから御坂の声と電撃の音。
援護の攻撃はしてくれていたようだ。
さすがに俺みたいな不死身じゃあるまいし、高電圧喰らえばダメージを負うはずだ。

「っておぉい何でぶへっ」

確かに電撃は木山さんに向かったが、バリアみたいなもので電撃が防がれた。
そしてそのまま木山さんが手を動かした。
途端に、横にあった自動車が俺に突撃してきた。

「君への対策は簡単に立てられるね」

「くっ、ちょっとあんたー！　大丈夫なのー！」

さっきの衝撃のせいで体の骨がいくつか折れてるが問題ない。
とりあえず問題ないことを御坂に言ってやりたいんだが……
壁と車に挟まれて押し潰されているせいで、なかなか声が出てこない。
まぁ死にはしないってわかってるだろうし、大丈夫だろう。

「ぬぐぐ……そぉい！」

ゴキリという音と共に、無理矢理体を捻って車と壁の間から抜け出す。
その際に腹を出っ張った部分に引っ掛けたせいで血が流れ出た。
道路にそれがいくらか零れて、そしてすぐさま傷が治癒していく。

「やってくれんじゃねえかよ！　かなーり痛かったぞクラァ！」

「……大人しくしていてくれればいいものを」

「どうせそんなこったろうと思ったわよ。アンタ、やたらしつこいもんね」

「電撃娘は黙ってろ！」

木山さんは俺の焦げ付いた服が更に血で染まり、下半身も斑模様になっている事に顔をしかめる。
やっぱりこの人も、人を傷つけることを良しとしてるわけじゃねーんだろう。
そんな覚悟は持ってるとしても、それを否と思ってるってわけだ。
この人も研究者だけど、俺の知ってる『研究者らしいものの見方』しかできないってわけじゃない。
研究者だからこそ、こういう事態になっても本人の善人としての理性もしっかり持ってくれてるって事だ。

「そうなりゃまだ止める手立ては……げっ！」

木山さんの立つ場所から何か波紋が広がったかと思えば、足元が崩壊し始めた。
ものの見事に円形にくり抜かれるように崩落……って俺飛べねーぞ！
俺が頭から下に向けて落下していく中、視界に御坂の姿が写った。

「っと」

「ずるいぞてめーチキショー！」

「うっさいわね！　高いところから落ちたくらいじゃ死なないでしょ！」

死なねーけど頭から落っこちるのは色々と辛いんだよ！
くそっ、パンツみてや……駄目だコイツ短パンだ！　お嬢様のくせに生意気だ！
もっとお嬢様らしく可愛いパンツを履け！

「ぶへっ」

頭から崩落した瓦礫の中に落っこちる。
首が折れたような音がしたが気のせいだ気のせい。
すぐさま頭を引っこ抜いて木山さんを目視する。

「君は厄介だね」

「……タイム」

「タイムは無しだ」

言うやいなや、木山さんは宙に浮かべた大量のコンクリブロックを流星群のように飛ばしてきた。
もちろん、標的は俺だ。
いやいや木山さん、いくら俺が不死身だからってコレはキツイと思うのですよ。
こんな事なら俺は不死身だぜイエーイとか言っとかなきゃ良かった。
俺はこんな無駄なことを考えながら、降り注ぐコンクリを甘んじて受け止めることにした。
どうせ逃げ切れるってものでもないしね。

こうして俺は頭を含む上半身をコンクリブロックで潰された。
しかし、残念ここで君の冒険は終わってしまった……とはならなかった。

「あれ？　やたら痛いけどそれほどじゃない？」

まるで動きだけを封じるかのように、俺はコンクリブロックに埋め込まれていた。
手首・足首から先と、頭だけが出ている状況である。
というかなんだこの能力！　土を操る能力だってのかチキショー！
これじゃあ手も足も出ないじゃないか文字通り！
俺がコンクリから出ている部分と頭をぶんぶん振って足掻くけどどうにもならない。

御坂もなんか水の弾丸っぽい攻撃を受けてたけど問題ないだろう。
とりあえず俺を何とかしてもらわにゃ困る。

「おい御坂！　さっさと俺を助け――」

「拍子抜けだな。レベル５が二人もいてこの程度のものなのか」

「チッ」

おい今舌打ちと同時に誰かがブチ切れた音が聞こえたんですがぁ！？
そして自分が横向きに立っている柱から、御坂は瓦礫を引っぺがした。
そのままそれを木山さんにシュート！

「いや、そのくらいの攻撃じゃさすがに意味ないと思うが」

「うっさいのよバカ！　んなのわかんないでしょ！」
俺がブツクサ言うだけでバカ呼ばわりはひどい。
そして案の定、木山さんは手から棒状の何かを出して跳んできた瓦礫を粉砕した。
ビームソードっぽいなぁアレ。
麦野に似たような感じのビーム喰らってるからよくわかる。

「ホラ意味無かった」

「黙りなさいっつってんの！」

「ぎゃあああああ！」

御坂が手に取った瓦礫が、俺に向かってレールガンの要領でぶっ放された。
まぁそのおかげで、俺の体を捕らえていたコンクリがぶっ壊れたんだが。
頭とか腹とかにぶつかってなくて良かったぜ、そんときゃ御坂は俺のグロい姿を見ることになったんだからな。
運のいい奴だ、本当に。

御坂がぶっ壊してくれたコンクリの中から生還し、木山さんに地面へと引き摺り下ろされた御坂の隣に立つ。
いくら特殊な素材でできてるから頑丈だとはいっても、所詮は服だ。
ボロボロになっちまったそれを、俺は地面へと脱ぎ捨てた。

「もう止めにしないか？」

そう、木山さんが言った。

俺と御坂は同時に木山さんの顔を見る。

「私はある事柄について調べたいだけなんだ。それが終われば全員解放する。誰も犠牲にはしない……」

「ふざけんじゃないわよっ！」

木山さんの言葉に御坂が怒鳴った。

驚いてそちらを見てみれば、今まで見たことも無いような御坂の顔があった。

「誰も犠牲にはしない？　アンタの身勝手な目的にあれだけの人間を巻き込んでおいて、人の心をもてあそんで……こんな事をしないと成り立たない研究なんてロクなもんじゃない！　そんなモノ見過ごせるわけないでしょうが！」

その言葉には、俺も色々と思うことがある。

自分の過去とか、色々。

「嫌な事も良い事も……思い出しちまったじゃん」

「はぁ？」

おっと、保護者の口癖が移ったか。

御坂もそんな顔でこっちを見てくれるな。

「俺も御坂の意見に賛成だ。木山さん、あんたの目的とやらには賛同できない。なんか理由があるんだろうけど、俺には俺以外の誰かを自分勝手に利用する事に対しての賛成なんかできない」

「……それだと、君は利用されてもいいみたいだが」

「ああ、かまわないさ」

いくら死ぬまで利用されつくされても、死なないのが俺の長所なんでね。

だからそうやって、誰かの役に立つしかないのさ。

「だから俺は、至極自分勝手な理由であんたを止めさせてもらう」

俺はそう言って、木山さんへと向かって駆け出した。

考え無しの特攻、御坂にはそう見えたのかもしれない。

だけど勿論、そんなことはない。

ちゃんとしっかり秘密兵器は残してあった。

上着と違って更に頑丈に作ってあるおかげで残っている、若干汚れてはいるが形はしっかり残っているズボンの内側に。

さっきまでは先制攻撃で何も出来なかったが……今なら！

俺は秘密兵器の力を借りて、思いっきり地面を蹴りつけた。

そして――

「なっ！？」

「えっ！？」

木山さんも御坂も、目を丸くして驚いている。

そりゃそうだろう。

さっきまで役立たずでしぶといだけだったような奴が、いきなり5mもの高さまでジャンプで飛び上がったのだから。

驚いている木山さんをそのままに、俺は木山さんが動かそうとしていたアルミ缶を蹴り飛ばした。
そのアルミ缶が遠くに吹き飛んで何故か爆発したが、それはどうでもいい。
俺は木山さんの横に着地して、そのまま左腕を背中側に捻りあげて地面へと押さえつけた。

「ぐっ」

「動かないでくれよ木山さん」

上手く押さえつけることが出来たので、そのまま動かないように声をかける。
そんな俺を見てすぐに近づいてきた御坂が問いかけてきた。

「ちょっとちょっと、あんた今の何なの？　あんな何mもジャンプなんかして……」

やっぱりそれを聞いてくるか。
まぁ当然っちゃ当然だけど。
仕方ないから答えてやろう。俺の秘密兵器だけど。

「この強化ズボンの内側に、あるものが仕込んであるわけだ」

うちの保護者に無理言って用意させたシロモノ。
安全装置がないゆえに警備員（アンチスキル）の試験運用から落ちてしまったが、それでも不死身の俺ならば十全に使いこなせるだろうそれ。

「発条包帯（ハードテーピング）っていう、まぁ身体強化を行うための補助装置みたい

なもんだな」

「……だがそれは、安全のための措置がなされていないはずだ。君の体にも相当の負担が――いや、そうか。そうだったな」

「木山さんはわかったか。……俺は不死身だからな。元から安全装置も何も必要ないんだよ」

ただ一つ、痛みさえ耐え切れてしまえばな。

「あんた、やっぱムチャクチャだわ」

「そんなん今更だろ？」

御坂に向かっておどけるようにそう言って、俺はもう一度木山さんのほうに目を移す。

多分、木山さんの目的はこの前言っていたことだろう。

助けなきゃいけない子達がいる、だったか。

他の何に変えてでも守りたい。そんな気持ちだったんだろう。

「生憎だが……」

「ん？」

「私はここで諦めるわけにはいかない！」

両手で押さえつけていた木山さんがそう叫ぶと同時、すぐ横の地面から何本もの柱のようなものが突き出した。

先端が尖っていないその柱が、何本も俺にヒットしていく。

「がっグ、ぅぇ！？」

「鳴川！？」

御坂が珍しく俺の名を呼んだ。
大丈夫だっつの、木山さんのお情けで先端が尖ってないただの柱だ。
鉄パイプよりは効かないさ。
それに、俺はまだ木山さんの体を押さえつけるのをやめちゃあいない。
だから俺は、きっと御坂ならわかってくれると信じて叫んだ。

「俺ごとやれ！」

多分、このまま抵抗されたら俺は手を離しちまう。その前に木山さんを何とかしないとならない。
なら俺たちはどうやって木山さんを止めればいいのか。
それは御坂の電撃を当てればいいだけの話だ。さっきまでは難しかったその方法も、今では意外と簡単だ。
いくら木山さんが電撃を防ぐすべを持ってたとしても、俺の体を通してそのまま木山さんに電流を流し込めば……防ぎきれないだろう？。

「いい加減に……しなさいっての！」

御坂はそう言って、柱に突かれる俺の背中に手を当てて電撃を放った。
俺の体と木山さんの体に電流が流れて、木山さんの能力行使も止まる。
手荒な真似だからあんまりこういうの見るのは好きじゃないんだけどな……まぁ、これで終わり――

『センセー』

――何だ？　今、頭の中に直接誰かの声が。

『木山センセー』

――これは、一体誰の声だ？　いや、この頭の中に直接流れ込んでくる感じは……？

「おい……これ……」

フラッシュバックをするかのように、誰かの……おそらくは木山さんの記憶が流れ込んでくる。
そんな中で振り返って見れば、御坂も呆然としている。おそらくはこいつも俺と同じ状態なんだろう。
一緒に喰らった電撃が発端だろうが……これは、木山さんが記憶している中でも鮮明なものが流れ込んできているのか？

木山さんが研究者ではなく、『置き去り（チャイルドエラー）』の子供達の教師をしていた。
そして子供たちと過ごしていくうちに研究者らしさってのが抜けていった……のか。
教室で服を脱いだり、相変わらず常識知らずのようだが。
『統括理事会の計画した実験の被験者たる子供達の調整』、始めの目的はそれだったとしても、たぶん教師として接するのはそれ以上に何かの意味があったんじゃなかろうか。

そして記憶も佳境。
行うのはＡＩＭ拡散力場制御実験。それに『置き去り』の子供達が被験者として参加していた。
俺には詳しくわからないが、記憶から一つだけわかったことはある。
それはこの子供達が、木山さんの事を凄く信頼しているということだ。

だが、しかし。
実験は失敗して子供達は犠牲となった。
いや、本当に失敗したのだろうか。
あの感じではまるで失敗することが前提であったんじゃないかと感じられてしまう。
今まで散々ひどい目にあった俺の、被害妄想のような何かであってほしいけどな。
でも、木山さんの受けた絶望は一体どれだけのものだったんだろう。
俺には、やっぱりわからない。わかるとは言えない。

「――――がふっ、げほっ、がはっ、げうぅぅ」
フラッシュバックが終われば、押さえ込んだ俺の手の下で呻く木山さんがいた。
電撃を受けたことのダメージというわけでもない、らしい。
「観られた、のか……！？　ぐぅっ」
頭を抑え、それでもなお足掻こうと木山さんが能力を使う。

しかし、念動力を使って近くの瓦礫を飛ばそうとした行為も途中で呻いて止まってしまう。
もう、限界だろ。それでも諦めることができないのは、やっぱりさっきの子達のためなのか。

「何であんな事……」

御坂が、木山さんを押さえる俺から数歩離れたところで言った。
おそらくは、さっき流れ込んできた記憶の事。

「俺も、興味があるな」

さっきの子達が今はどうなっているのか。
それに、どうしてあんな事にならなきゃいけなかったのかも。

「くっ……フフフフ」

自嘲したかのような笑いを浮かべた木山さんが、口を開いた。

「あの実験の正体は『暴走能力の法則解析用誘爆実験』。能力者のＡＩＭ拡散力場を刺激して、暴走の条件を探るものだったんだ。……あの子達を使い捨てのモルモットにしてね」

俺に抑えられながら木山さんは、本当に苦しそうにそう言った。
俺はそれを聞いて、やっぱり勘は当たっていたと思ってしまった。
はずれて欲しかったのに。
それに暴走することが前提の誘爆実験という事は、一体木山さんが子供達との間に築いてきたものは何だったのか。
御坂をそれを聞いて、信じられないといった様子だった。

「人体、実験……だったらそれこそ警備員に……」

「２３回」

「それ、何の回数なんだ？」

「あの子達の回復手段を探るため、そして事故の原因を究明するシミュレーションを行うために、『樹形図の設計者』の使用を申請して却下された回数だよ。統括理事会がグルなんだ。警備員が動くわけがない」

もう誰も信用などできないといった感情が、言い捨てた言葉から感じられるようだった。

きっと木山さんには子供達を救うことすら出来ないこの状況を打破する方法がなかったんだろう。

こんな方法でしか救う方法を考えられなかったんだろう。

――でも、それは間違ってる。

「誰にも頼れなかったのか？　もっと上手く、何か良い方法があったはずだ。こんな、誰かを犠牲にするなんてやっても木山さんがそいつらと……」

「君に何がわかるっ！」

「――ッ！」

俺が押さえつけているにもかかわらず、思い切り体を捻って木山さんが吼えた。

「あんな悲劇は二度と繰り返させはしない。そのためなら私は何だ

ってする。君も被害者なら、そう思ってもおかしくないはずだ！
私は、この街の全てを敵に回しても止まるわけにはいかない――ぎっあ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝！？」

「どうしたっ！」

「ちょっと……一体何が」

突然、俺に向かって叫ぶように口を開いていた木山さんが、頭を掴んで苦痛の悲鳴を上げだした。
尋常ではないその様子に、俺は木山さんを抑えるのをやめて彼女の横に跪いた。
一体何が起きているのかわからないが、これはあのカエル医者のところにでも連れて行ったほうがいいんじゃないだろうか。
俺がそんなことを思った次の瞬間、木山さんがネットワークの暴走だとか呟いた時だった。

突然木山さんが倒れ、俺はそれをなんとか抱えることができた。
問題はそっちじゃない。
木山さんの頭から、突然湧き出るように現れた変な胎児っぽい化け物が問題だ。

クソッ、一体俺はどうすれば……

「キィャアアアアアアアアアアアアアア」

俺は木山さんを抱えて、一時撤退を決め込むことにした。
悪いな御坂、俺の能力は攻撃するにはあんまり向いてないんだよ。
とりあえず、自分の方に飛んできた瓦礫を蹴り飛ばして援護くらいはする。

メインの攻撃方面はそっちでなんとかしてくれ。

ドンパチ攻撃する音が聞こえる中、俺は化け物から見えないような位置へと逃げ込んだ。
そんな中で、俺が背負っている木山さんが目を覚ましたようだ。

「少年、降ろしてくれないか」

「了解です。そしてあの化け物が何なのか説明してください」

「む……」

背負っている木山さんを地面に降ろし、俺は化け物の説明を求めることにした。
弱点でもなんでもいいから、あれは何とかして倒した方が絶対にいい。

「君は何も言わないのか？」

「さぁ？　何を言って欲しいんですか？」

「……はぁ。いや、さっきも言ったが、君はもう私を信じられないだろう？」

「なんで？」

さっぱりわからん。

「いや、だって君は……」
「俺はな」
「……顔が近いぞ、少年」
「うるせい。俺は、一度でも信用した奴は死んでも信用することにしてるんだよ。それに、さっきの記憶を見た限りじゃあ凄くいい先生だったしな、木山センセーはさ」
「そうか……そうか。ありがとう」
お礼を言われる筋合いは別にないが。
とにもかくにも今はあの化け物の話だ。さぁきっちりかっきり教えてもら――
「鳴川さん！」
「こんな所にいた！　探したわよ！」
「おお、この声は初春に御坂か！」
さっきまでは御坂のバトル音、現在は上の方で警備員の銃撃音がしてたせいで、全く近づいてることに気付かなかった。
まぁいい、これで俺が伝える手間もなく話が通るわけだ。
「もう、話してもいいかな？」
「ああ、頼むぜ木山さん」

「ったく、俺は結局補助かよ。格好がつかないなぁ」
「そんな！　十分カッコイイですよ鳴川さん！」
「お世辞はいらんよ」
発条包帯（ハードテーピング）で強化した脚力で、初春を背負ったまま階段を駆け上がる。時折流れ弾が飛んでくることもあるが、そんなもん当たるわけないだろうが！
脚力の強化は伊達じゃないぜ！　初春の体重なんてそれほどのもんでもないしな。背負ってても全く問題ない。
「おら到着！　行け初春！　アレを流して来い！」
「はいっ！」
御坂はもうあっちに向かったみたいだな。警備員への根回しもやってくれるらしいけど。
……つか、おいおいおい。そういや忘れてたけどそうだったなぁ。
「あんたは何をやってるじゃん！」
「うるっせーよ！　今回はサポートなの！」
俺は眼鏡の警備員と一緒にいた黄泉川に怒鳴られた。
あんまり顔をあわせることが無いにしても、その反応はひどいだろう。

「ってそれよりも時間がない！　さっさと初春の持ってる治療プログラムを学園都市に流してくれ！」

「それはさっきの子に聞いてるじゃん！　……ってその足、アレを使ってるのか」

「非常事態だったんでね。それより……」

「ああ、わかってるじゃん！」

こちらに飛んでくる化け物の流れ弾を、俺は瓦礫を蹴って打ち落とし、黄泉川は盾でガードした。
眼鏡の警備員は初春と一緒に警備員の車両に行ってデータ送信中だ。
遠めに見る限り、御坂の方も激戦やってるようだが……頼むぜ。原子力実験炉に突撃なんてシャレにならんからな。
もう数分でこっちは治療プログラムの音楽を流せるんだ。

「ま、こういう活躍は御坂のほうがお似合いだしな」

そんな事を言いながら、俺は若干ため息をついた。
少しくらいは、もっと自分の手で何とかしてみたかったという気持ちがないわけじゃあないのだ。
そうして遠くの戦いを眺めつつ警戒していた俺の元に、眼鏡警備員の声が届いてきた。

「隊長！　転送完了しました！」

「これで……あの化け物もなんとかなるじゃん？」

「それに佐天さんも。幻想御手使用者の人たちも。なんとかなるん

ですよね」

「あとは、御坂がアイツをぶっ飛ばすだけだな」

頑張れよ、レベル5の電撃娘。

早くもスピーカーから流れてきた音楽を聴きながら、俺は小さく呟いた。

そうしてスピーカーから流れる不思議な音楽の中、あの化け物が御坂に撃ち貫かれて消滅していくのを俺たちは目にしたのだった。

で、それでめでたしめでたしっていけば良かったんだけどさ。

「あの、子供達の事はどうするの？」

警備員の車両に、手錠をつけた木山さんが乗り込もうとしていた。

その横で扉を開いてるのが黄泉川で、こっちを見てるんだから笑えない。

木山さんは俺が若干気まずい空気を感じてる中、御坂の質問にはこう答えた。

「もちろん諦めるつもりは無い。もう一度最初からやり直すさ。刑務所だろうと世界の果てだろうと、私の頭脳は常にここにあるのだから」

それでこそ木山さん……かね。

あの記憶を見て、あの叫びを聞いて、その程度で諦める事は無いとは思ってたけどさ。

「ただし、今後も手段を選ぶつもりは無い。気に入らなければ、その時はまた邪魔しに来たまえ」

「……あの、警備員の目の前なんだからさ。今度は犯罪に走らない方向で頼むぜ？」

今、こう言ってる最中も黄泉川の視線が痛いんだからさ。
木山さんの頭脳なら、それくらいの事はきっとできるだろうしな。

「そんじゃ。またいつか会う日まで」

「ああ、君も気をつけたまえ……っと、そうだ」

とりあえず挨拶をして、そのまま手でも振ろうかとしたところでまた声がかかった。

「何です？」

「……今度会うときは、さん付けはいらないよ」

おおそうか。俺もそういう呼び方は実に面倒だと思ってたのだ。
というかあまりに敬語がデフォルトになりすぎて困ってたくらいだ。
まぁ、そういうことなら俺もある。

「んじゃ俺も一つ。少年はやめてください。癖なんだろうけど、できれば苗字か名前で」

「善処しよう」

そんなくだらない会話を少々交わして、木山さんは車両に乗り込ん

だ。
黄泉川がこっちを睨みつけてたような気がするけど気のせいのはずだ。
後で無茶やった事を怒られそうだ。覚悟しておこう。

「お姉さまー！」

「うぇっ！？　黒子！？」

車に乗って突然現れた白井とか、それにうめき声を上げる御坂とか。
たぶん佐天のことを思い出したんだろう、急いで車に乗り込んで病院に向かう初春とか。

「一気に日常風景に戻っちまったな……」

まぁ平凡な一日なのが一番いいんだけど。
さて、とりあえずはこの上半身裸の状態をなんとかしないとな。

……ボロボロになった服を拾いなおしても仕方ないし。ホントどうしよう。

＝＝＝

学園都市第１０学区。

そこに数多くある研究所の一つで、とある実験が行われていた。
「実験素体１０の内、７が失敗で３が成功？　ふむふむ、失敗作を３割も利用できたのだから十分か？」
灰色の髪を逆立てたその中年の男は、白衣を着たままで研究室をウロウロ歩く。
彼の前、その研究室の中央には１０本のビーカーがある。
そのビーカーの中には、液体の中に人影が浮かんでいる。
「元々、１０しか借り受けられなかった素材ゆえ？　オリジナル程の能力がないのが辛いな？」
手元の機器を操作しつつ常に疑問系で話す男。
その指先は軽快にキーボードの上を動き、パネルでは恐ろしい速さで記録が入力されていく。
そして最後にタンッと強くキーボードを叩き、彼は白衣を翻して部屋を出る。
その口元には、確かに笑みが浮かんでいた。研究者としての、狂ったような笑顔がそこにはあった。
ついに、彼の研究は最終工程へと入ったのだ。
若干の鼻歌交じりで彼が去っていった研究室。
１０のビーカーのうち、中身が排出され始めた７つ以外の３つ。
その下には小さく、走り書きのような文字でこう記されていた。
左のビーカーから順に、『ＵＣ－１』『ＵＣ－２』『ＵＣ－３』と。
このビーカーの中身が起動されるのは、もうすぐ先だ。

第八話（後書き）

あとがき

なんとか終わらせた感の溢れる感じですね。
なんともはや申し訳ない。

ということで次回からの章を予告しますか。

幻想御手事件をなんとか終わらせ、鳴川昴は日常を過ごしていた。
しかし舞い込む事件（トラブル）の数々。
そして彼の過去を思い起こさせるとある場面へと遭遇した彼は、最強の存在と対峙する。
果たして彼は、誰かを救う事ができるのか。
彼の元へ届く不吉な噂とは……

次章『重複（マルチデッド）死体編』

プロローグ（前書き）

重複死体（マルチデッド）編の始まりです。
オリジナルと原作の半々……になればいいなという願望によってできています。

プロローグ

暗い暗い路地裏で、彼らは口をぽかんと開けた変な奴を見つけた。

「ア――――」

「なんだこいつ？」

「さぁ……でも女、だよな？」

学園都市の落ち零れ、スキルアウトと呼ばれる彼ら。
たまたま路地裏を歩いていた彼らは、こうして女のような変な奴を見つけた。
服装では判別を付ける事が出来ない。
女とも男とも取れる、灰色の上下を着ている人物。
普段なら、たった二人でそんな奴に近づいたりはしなかっただろう。
だがしかし、そいつは明らかに精神を病んでいた。しっかりとした意識を持っていなかった。
おまけに彼らの興味を引いてしまう程度には、整った顔立ちをしていた。

「どうするよ」

「いや、俺に聞かれても……」

二人のスキルアウトは考えた。
彼らは最近、とある事情で能力者に対する恐怖心もうっすらと消え

ていたが故に。
いつもならこんな不気味な奴には近寄らないだろうに。
だから彼らは逃げる時間を失うことになった。

「ああ、やっと見つけたぜ『リーダー』」

「ウ――――」

「あらら、駄目だな。薬が切れてやがる」

「……また、か。面倒な『リーダー』、だ」

スキルアウトたちがやってきた方向とは逆の方から、唐突に二人の男が姿を現した。
藍の髪をオールバックにしている背の高い男と、スーツを着たスキンヘッドの中肉中背の男。
目の前で彼らを見ているスキルアウト達を意に介さず、その二人は自分達が『リーダー』と呼んだ女に近づいた。
オールバックの男は全く反応を示さない『リーダー』の様子に首を振ると、スキンヘッドの男に向かって右手を差し出して口を開いた。

「佐伯、アレよこせアレ」

「……了解、だ。これ、だ」

佐伯と呼ばれたスキンヘッドの男は、差し出された右手へと懐から取り出した注射器を置いた。
それを受け取ったオールバックの男は、躊躇無くそれを『リーダー』の首筋へと注射した。
注意が必要なはずのその行為にも既に慣れきっているようだ。

目の前の三人が放つ異様な雰囲気に呑まれ、スキルアウト達が逃げることも出来ないでいると、即効性であったらしい注射の効果が『リーダー』に表れた。
目を見開いた『リーダー』は、ギロリとオールバックの男を睨みつける。

「菅沼ぁ……」

「んだよリーダー」

菅沼といわれたオールバックの男は、ニヤリと笑いながらリーダーの顔を覗き込む。
途端、狂気の笑みを浮かべたリーダーが右手を振り回して菅沼を思い切り殴ろうとした。

「おっとぉ」

「かわすんじゃねえよ菅沼光磁ィ！」

「はっは。あいにくと黙って殴られる趣味はねーぜぇ？」

「……困った奴だ、な。『リーダー』も落ち着け、よ」

振られた腕を後ろに下がって避けた菅沼に、叫ぶようにして話す『リーダー』が殺意を向ける。
なんとかそれを押さえようと、佐伯が『リーダー』の肩に手を置いて怒りを静めようとした。
この3人の中でも比較的に慎重派であるらしいスキンヘッドの佐伯にとっては、こうして仲間内の喧嘩を止めることも役割の一つであるようだ。

なんとか狂気に満ちた笑みを『リーダー』が内にしまい込み、菅沼と佐伯に向けて目を細めて薄い笑みを浮かべる。

「それでさぁ？　そこの奴らってなんなわけ？　殺していいの？」

「あ？　別にいいんじゃね？　どう思うよ佐伯ぃ」

「構わないはず、だ。目撃者の口は封じる、ぞ」

「だとさ、『リーダー』」

おどけたように話しかけてきた菅沼の声を聞いて、『リーダー』の視線がスキルアウト達に向いた。
途端に向けられた殺気を本能で感じ取り、スキルアウト達は一目散に逃げ出した。
何故今まで逃げられなかったのかと思わせるほどの素早さで、一目散に路地裏の出口を目指して走って行く。
しかしどうして彼らから逃げられようか。
ただの無能力者であるその二人が、やすやすと逃げられるはずも無いだろうに。

「おら、逃げんじゃねえよ」

短くそう言った菅沼が、逃げる二人に右手を向けたその瞬間。
路地裏に散らばっていた廃材や鉄筋、近くで倒れていたフェンスなどがスキルアウト達に襲い掛かった。
多数の釘や尖った鉄材が足へと突き刺さり、フェンスがその行き先に壁を作る。

「ひぃぎっ……が」

「いぅがあああああああああぶっ！？」

スキルアウト達の上げた叫び声を無理矢理止めるようにして、いつの間にか移動していた『リーダー』が能力を発動させた。
その能力はスキルアウト達の絶叫を力ずくで食い止めた。
顎から下を捩れさせ、会話を不可能どころか呼吸を丸ごと不可能にする事で。

「ぃひっひひひひあはっははっははは！」

笑い声を上げて、『リーダー』の女は両腕を大きく広げる。
そんな『リーダー』を中心として、周囲の地面や壁、そして近くにいたスキルアウト二人の全身が。
ぐにゃりぐにゃりと、材質の種類など関係なしに周囲の全てを捻じ曲がっていく。
スキルアウト達は全身を生命活動が不可能なほどに歪められた。もうどれだけも生きる事はできないだろう。

「ったく、リーダーの能力は問答無用だから怖いぜ」

「全く、だ」

「じゃ、いつも通りの処置で」

「了解、だ」

離れた所で笑いを浮かべる菅沼と溜め息をつく佐伯。
スキルアウト達が最後に見たのは、その両名が面倒臭そうに自分達に近づいてくる光景だった。

＝＝＝

幻想御手事件が解決してしばらく。
俺は菓子折り片手に病院を訪れていた。
というのも、この病院に上条が入院しているからである。
どうやら俺の知らない間に、上条は新しい不幸に見舞われていたらしい。
あいつもとことん不幸な奴だな。
ま、俺という友人が黒蜜堂のあんみつを持って見舞いに来てやったのだから感涙しながら嬉しがるが良い。
ハッハッハッハッ。

「……やたら騒がしいぞこの病室。一体何事？」

俺はある病室の前で中の様子を伺っていた。
だって中から上条だと思われる悲鳴っぽい声と、ぎゃーぎゃー騒ぐ女の子の声が聞こえるのだ。
聞き覚えが無い声……という事は、またアイツはフラグを立てたのか。
全く、我が友人だけにさすがだぜ上条当麻（フラグマスター）。
だがそんな事で空気を読むような俺ではない！

「オラァ！　病院じゃあ静かにしろやクラァ！　一体何を――」

「……あ」

「うぅぅぅ、う？」

「ははは、コイツは邪魔したな。また来るぜ」

「おっ、おい！？　ちょっと誤解してるんじゃ――」

お前の誤解は誤解じゃ無いだろ、上条さんよ？
全く、女の子を連れ込んでベッドの上でイチャイチャなんていけない事だぜ？
まぁいいさ。今日は邪魔しないからゆっくり女の子と楽しんでくれ。
俺も忙しいんでな。

アディオス上条、フォーエヴァー。

「っておいこれ何なのさ」

「見てわかんないじゃん？」

「残業」

「大当たりじゃん」

病院から帰ろうと出てきた途端、俺は車の中へと引きずり込まれた。
いきなりなんだと思って運転手の顔を見れば、そこにいたのは黄泉川愛穂。俺の保護者だった。
一体なんだよと思って聞けば、そのまま無視して車を走らされて黄泉川の自宅に引きずり込まれた。
そうして机の前の椅子に座らされ、こうしてさっきの質問に繋がるわけだ。
とりあえず、ごっちゃになっている書類の山から一枚だけ引き抜いて目を通す。

「げっ、これって……」

「そ。幻想御手事件のヤツ」

やたらと見覚えがあると思えば、つい先日の事件の書類だった。
警備員だからそういうのもあるってわかるけど……なんだ。

「俺にどうしろってんだよ！」

「ほら、関係者だから事情聴取ついでに手伝わせようかと。ウチの子なんだからそれくらいは」

「お前の子じゃねえよ！」

「おぉ、そうだったじゃん」

ぽんぽんと頭に手を置かれながら言ってるあたり、この人は絶対にわかってない。

わかってたらそういう事言わないって絶対。
ほら、今だってあっはっはって笑ってるじゃないかコンチクショウ。

「……ん？」

そんな書類を黄泉川と一緒にとりあえず分類別にまとめて整理していると、とある一枚の紙が俺の目を引いた。
それは幻想御手事件の書類ではないのだが、この人は問題が起きるたびに矢鱈滅多らに片付けようとするし、関係ない書類がここに埋まってたとしても俺は驚かない。
問題は、この中身だ。

「これは……？」

「ん？　何してるじゃん？」

「え？　あっ、ああ、なんでもないなんでもない」

すぐ横で書類を片付けている黄泉川に覗き込まれ、俺はその書類をすぐさま目の届かないところにさっと隠した。
この人、やたらと心配性だからこうでもしないと行動制限でもかけてきそうな気がしてならない。
まぁとりあえず、今はさっさとこの片付けを済ませてしまおう。
この書類については後回しだ。
……でも、この書類に添付されてる画像。
人気の少ない路地で何かが起きていたという書類の、隅に見えている小さな違和感。
窪んだコンクリートの地面、奇妙に捻れた廃材やフェンス。
俺はこれを、ずっと昔に見たことがある。

俺がこうして生きている以上……いや俺は死ねないんだが。
これを引き起こせるだろう俺の知り合いも、もしかしたら生きていた？
あの、忌まわしき研究所から解放されていた？
いや、俺はもうアレとは関係ない。
だが……気がかりだ。本当に、本当にそうであるとするのなら――

「確認しなきゃいけないな」

幸い、この書類はそこまで前のものではないようだし。
急げばまだ現場は残っているはずだ。
場所は――

「第十学区、か」

翌朝、牛乳を一本ラッパ飲みをした俺は玄関に立っていた。
随分気分よく早起きできたということで、黄泉川の分の朝食も作っておいてやった。
昨日はずっと書類整理につき合わされたけど、上手い晩飯も食わせてもらったし泊まることにもなってしまったからな。
一応、これくらいはしておくべきだ。

「それじゃ、行ってきます」

俺はそう言って、その家を後にした。
目指す先は第十学区。
俺の勘が間違ってなければそこには手がかりがあるはずだ。
俺が知る中でも危険人物中の危険人物、『空間歪曲（フロアディストネーションきょくてまわり）』の曲亭廻の手がかりが。

「ま、頑張るじゃんよ」

たった今少年が出て行った家の中。

玄関のすぐ傍にあるドアの向こう側で、保護者はそっと呟いた。

プロローグ（後書き）

あとがき

プロローグにつき短めでござる。
やっとオリジナル展開に向けて発信だぜい。

さて・・・これからどうするか。大体は決まってるが・・・さて。

八月二日～九日
『ポルターガイスト』事件。（アニメ最終話が九日）
８月１０日　ミサカがクローン計画に……

第一話（前書き）

これでいいのか不安になってきた。
というかオリキャラ（敵）が強すぎるんじゃないかと不安に（ｒｙ

第一話

タクシーに乗って、俺は第十学区へ到着した。
まだまだ昼間だというのに、なんだか薄暗い雰囲気の場所だ。
善は急げということもあるし、たむろするスキルアウト達に目を付けられないうちに現場へと急ぐことにする。
御坂みたいな超能力者であるならスキルアウトくらい無視して行ってもいいんだろうが、俺の場合はそうでもない。
いくら不死身とはいえ大量のスキルアウトからリンチにされたらどうしようもないからだ。……まぁ、相手が殴り疲れるのを待つという手もあるにはあるが、それだと時間がかかりすぎる。
いくつかある奥の手を使ってもいいけど、さすがに生身の相手を殴るのに使のは駄目だろうしな。

「確かこっちに……」

薄暗い路地を、奥へ奥へと進んでいく。
そのまま１０分も歩いただろうか、やっと俺は目的の場所へとたどり着いた。
その間、スキルアウトの連中に出くわさなかったのは運がいいと言うほかない。
既に警備員に報告されていたから期待はしていなかったが、まだ現場にはその歪んだ傷跡が残っていた。

「間違いない。削ったわけでも力づくで曲げたわけでもない。あの能力だ」

窪んでいるのにもかかわらず滑らかな表面を晒しているコンクリートの地面を撫で、俺は呟いた。
例えるなら複雑な硝子細工だろうか。コンクリートの地面が全くひび割れることなく歪んでいるのだ。
俺の知る曲亭廻の『空間歪曲』の能力を使った痕跡そのものだ。
あの能力は、材質や質量に関係なく能力範囲にあるもの全てを思いのままに歪曲させる能力だったはずだ。
空間移動の次元において念動力の効果を発揮するとかなんとか……
俺には説明できないな。近づくのが超危険だと覚えておけばいいだろう。

「そんな奴がなんでこんな所に……」

同じ能力を持った誰かだという考えもあったが、あんな能力を持っている奴は一人しか考えられなかった。
しかし、どうしてここにという問いがいつまでも頭の中に残る。
俺が昔いた研究所で、あいつは俺を殺す手段として連れてこられただけだったが……しかし。その後で何かの実験に使用されて『廃棄』されたと聞いた。
それがどうして生きている？

「……ッ足音！？」

その場へかがんでいた俺の耳に、小さな足音が確かに届いた。
だんだんと大きくなるそれは、こちらへと確実に近づいてきている。
俺は急いでその場から移動して狭い横路地の物陰へと隠れた。
もしも足音の主がこの状況を作り上げた曲亭廻の仲間だったりした場合、隙を突いて捕えれば情報が得られるかもしれない。

「……」

息を潜めて近づく足音を待ち受ける。
よく考えたらスキルアウトだという可能性もあるが、その時はその時だろう。
そうしてしばらく経ち、その足音の人物が現れた。
暗闇の中でイマイチ顔などがよく見えないが……近くまで来て気付いた足音の軽さ。うっすらとした影でわかるスカートからして、女だとわかる。
そいつはさっきまで俺がいたところで、窪んだ跡をじっと眺めている。
何をしているのかわからないが……俺と同じように調べているのか？　だとしたらあいつの仲間だという線はかなり薄れるが。

「うーん……やっぱ犯人は犯行現場に戻るって言うし。結局、ここで張るのが定石って訳よね」

……オイィ？
今、確かに聞こえたんだが？
とんでもなく聞き覚えのある声が確かに聞こえてきてしまったんだが？
主にこの場にいてもおかしくなさそうな学園都市の暗部に所属している金髪の馬鹿だっけか。いや、さすがにその覚え方は悪いな。
とにかくだ。なぜこの場にいる、フレンダ。お前さん直接戦闘タイプじゃないだろうに。

「〜〜〜♪」

いったい何やってんだ？　あいつは。
不気味というか怪しいというか、屈んで何かをしているみたいだが。

果たして――

「……そこで何やってるんですか？　超怪しいですよ」

「は？　ぬぉわっ！？」

怪しいフレンダを観察していたら怪しいと言われ、振り向いた先にはまたも知った顔。
最後に会った時に着ていたのと似たワンピースを着た絹旗最愛がそこにいた。そしてじとっとした目でこちらを見ている。
いや、なんでまたこんな所に？

「いい加減キモイので立ったらどうですか？」

「キモイ言うんじゃねえよ！　傷つくだろ！　体は不死身でも心はガラスなんだよ！」

「本気で言ってるなら絶交しますよ」

なんだか絹旗が冷たいです。
俺が悪いのか？　そうなのか？
それよりもなんでこいつらがここにいるのかを聞いたほうがいいか。

「で、何でここに鳴川が？」

「それは俺のセリフだよ！　なんでお前らここにいるんだ？」

「お仕事です。まぁ鳴川には超関係ない事ですけど。それで鳴川は何故？」

なるほど。こいつらアイテムに来た依頼でここに来たらしい。
まぁアイテムも暗部だし、そういう事もあるんだろう。
というかまさかだ。アイテムがそういう風に関わってくるという事は、曲亭廻という女はそれだけヤバい事やらかしてるって事なのか？　まぁ能力とか性格からしてヤバいのは知ってるが。
なんせ俺を何度も殺すのが大好きって奴だったしな。

「俺はちょっと知り合いを探しに来たんだよ。ここの写真をたまたま目にしたんでね」

「……まぁ、鳴川の超勝手にすればいいですよ。私たちの邪魔さえしなければいいですから」

「助かるよ。そっちの依頼がどんなのか知らんから何とも言えないけどな」

で、フレンダは何をやってるんだ。
さっきからあっちでゴソゴソやってるのがすごく気になるんだが。

「あれ？　鳴川じゃん。こんな所で何やってる訳？」

「話をややこしくすんな。いきなり話しかけられても困るんだよ本当に！」

そんな感じで絹旗と話していると、突然フレンダが話しかけてきた。
どうやら用事は終わったようだ。
首をのばしてフレンダの後ろを見ても特に何かやった後は見えない。
……何だったんだ？

「ま、後は相手が引っ掛かるのを待つだけってわけよ」

「なんか仕掛けてたのか？　というか何を根拠にこんな路地に」
「今回、消す相手に超神経質なメンバーがいると聞いて調べたら、案の定この場にカメラが設置してありました。逆手にとって一網打尽にします。麦野も準備済みです」
「おいおい、俺に教えてもいいのかよ」
「結局、鳴川ってお人好しだし。元々こっち側に近いから特に問題ない訳よ」
「鳴川は超お人好しですし。言っていい事悪い事の区別くらいはつくはずですからね」
「あーはいはい。俺のイメージはそういうので固定ってかよ」
俺、こいつらに優しく奢りすぎたみたいだな。信頼されてるのかどうかすらわからん。
いやまぁ馬鹿にしてるわけじゃないと信じたいが。
――あれ？　今、聞き逃せない発言がなかったか？　カメラがどうとか、俺って結構前にここについたよな？　それに調べようと思ってモロにごそごそやってたし。
「あ、あのな。少し言いたい事が……ってうわォう！？」
「っていきなり！？」
「対応が超早すぎます！」

いきなりの襲撃。ってこれ、どう考えても俺のせいじゃねえか。
降り注ぐ鉄骨をなんとか避けながらそう思う。
絹旗の方はこんな攻撃受けても『窒素装甲』があるから全く問題ないだろうが――やっぱり気にはなる。
それにフレンダもいるしな。
まぁ、鉄骨を普通に受け止めてぶんぶん振り回してはじいてるのを見る限りそんな心配はいらなかったようだが。

「……さすがだな。おい。そのハイスペックぶりには俺も驚きだぜ」

「超うるさいですよ鳴川。さっさと囮になってください」

「へ？」

右手で鉄骨を持ち上げたままの絹旗が、左手で俺の首をひっつかんだ。
そしてさっきまでフレンダがいた路地に向かって思い切り振りかぶった。
どうやら、そっちに敵の能力者がいるらしい。そして俺が囮と。いやまぁ自分でも自分が囮役に適してることくらいわかるけどな？

「結局、鳴川のせいだって事はバレバレな訳よ」

「ちょ、投げるんじゃ――ぎゃあああああ！」

俺は見事な放物線を描いて横の路地から投げだされた。
首が千切れるかのような激痛が走ったが、血が流れてないから大丈夫だと思う。

「いだだだだ……」

「お前、アイテムの奴か？　変だな、女ばっかりだと思ってたんだが……まぁいいか」

座り込んで首をさすっていると、すぐ近くに男の足が見えた。
続いてかけられた声に反応して顔をあげれば、そこには藍の髪をオールバックにしたホストっぽい男が立っていた。
俺の事を訝しげな眼で見ながら首をひねっている。
どうやら俺のせいで来たくせに俺の事は全然眼中になかったらしい。
なんて奴だ。まぁ俺がアイテムのメンバーじゃない事は確かだから間違ってないけど。

「まぁいいや。死ね」

ホスト男が片手を上げると、何本もの釘や先が折れて鋭くなった鉄パイプが宙へと浮かぶ。
見たところ、念動力かなんかの能力か？
俺はこう言うのが一番苦手なんだがな……串刺しにされるとどうにも動けないし。
っとそんな悠長な事言ってる場合でもなさそうだ！

「死ねと言われて死ぬ馬鹿はいないっての！」

その場へ降り注いだ鉄材の雨をなんとか避けて、相手から一度距離をとる。
せっかくフレンダや絹旗がいるんだから協力してもらおう。

「鳴川！　どいてください！」

「うぉっ！？」

絹旗に呼びかけられて横っ跳びした途端、さっきまで俺がいたところを鉄骨が恐ろし勢いで通過した。
あんなものにぶつかったら確実に貫通して串刺しになって死亡だろう。
問題は、あのホスト男の能力のレベルがどの程度かって事だ。
あれだけ勢いが出ているのなら、念動力とかを使って止める前に速度が落ち切らないはずだが……

「ハッ！　うぜぇ！」

そいつがそう言って片手を振っただけで、鉄骨が弾かれて飛んで壁に刺さった。
そんな様子を見てフレンダが言う。

「少なくともレベル４は確定ってわけね」

「お前、なんか仕掛けてたんじゃねえのかよ」

「リモコン式の爆弾仕掛けてさっきから何度も試してるんだけど……」

「……作動しないのか？」

「てへ」

なるほど、こいつも加勢できなくて困ってたわけだ。
でもその『てへ』は正直いらんかったな。
――しかし、リモコン式の爆弾が作動できないとは。いくらフレンダがアホの子でも、仕掛けた爆弾が整備不良だなんて事はないだろ

うし。だとすれば、奴の能力が爆弾に何らかの干渉を与えたとでも考えるしかないが……

「死ね死ね死ね！　うぜぇんだよクソアマがぁ！」

「それはこっちのセリフですよ、この超クソ野郎がァ！」

あっちで鉄骨使ったチャンバラやってる絹旗とホスト男の戦いは首を突っ込めるレベルじゃないから放っておこう。
なんかキレてるのか知らんが怖いし。
にしても、絹旗は窒素装甲使ってあの鉄骨を振り回してるんだとしてあのホスト男の能力は何なんだ？
念動力のような遠隔操作ができて、リモコン爆弾も止められて、鉄骨をもって振り回すこともできる。
何の能力だか知らんが、なかなか万能で羨ましいなぁ。

「つーかおいフレンダ、麦野はどうしたんだよ」

「……さっき連絡しようとしたんだけど、携帯がぶっ壊れたのよ」

「はぁ？　じゃあ……って俺のもじゃねえか！」

最悪だ……携帯壊れるとかマジついてない。
というか状況からして、これもあのホスト男がやったのか？
マジでどんな能力何だよ。携帯とかリモコン爆弾壊すのは御坂みたいな電気能力者くらいしか思いつかんぞ。

「まぁともかくだ。絹旗もあれだと埒が明かなそうだから麦野を呼びに……」

「そうはさせん、ぞ」

「は？　ゲフッ！」

いきなり背後から話しかけられたと思った瞬間、視界が逆転して俺は地面へと投げ倒されていた。
ガチャリという音に気付いた時には、後ろ手に手錠を掛けられていた。
俺を投げ飛ばして組み伏せたスキンヘッドの男は、そのままフレンダへと向き直った。

「時間もない、し。合流されては面倒だから、な」

どうやらこいつら、麦野達と合流してほしくないらしい。
まぁあいつレベル5だから当然か。
……俺はいいんだよ。ファミコンマリオの残機が無限になったとでも思っておいてくれ。

「つーわけでフレンダ。そいつ頼む」

「……結局、鳴川って役立たずな――」

「うっせーよ！　麦野だって連絡なけりゃあすぐ来るんだからそれまで待ちゃいいだけだろ！」

いくらなんでも、絹旗だって轟音出してバトルしてる上に建物が損壊しかけたりしてるんだ。
その上連絡が取れないとなれば麦野たちだってすぐに駆けつけるだろ。
それにここは深いとはいえ一応路地なんだから、いくらなんでもそ

こまでの大騒ぎを起こしたら警備員だって来ちまうかもしれんしな。
まぁ、上からの圧力で情報規制されてたら無駄だろうけど。
だからフレンダ、お前は時間稼ぎさえすりゃいいんだ。このスキンヘッド、わざわざ俺に手錠なんかかけるあたり使える能力なんてたかが知れてるはずだ。

「それはどうか、な？」

「何？」

「厄介な敵には、厄介な味方を当てるのが定石、だ。そして雑魚は雑魚が相手をする、ぞ」

「エヒヒヒヒヒハハハハッハハハハハハ！」

「……ふーん。あんたが逃走者ってわけ？」

「殺ぉぉォォォッす！　邪魔すんじゃね……ひひゃはははははっは！」

「狂ってる？」

「それっぽいわね。ま、さっさと終わらせましょう」

第四位のレベル5である麦野沈利の手から、灰色の上下を着たツリ目の少女へと野太い光線が照射された。
その攻撃を止められるものなどごくごく僅か。
第三位の超電磁砲の御坂美琴や、それ以上の第二位や第一位。例外的に攻撃を受けてもなんとも動じぬ不死身の番外。そしてその不死身の少年の友人でもある幻想殺しの上条当麻もおそらく該当されるだろう。
麦野沈利の原子崩しが、恐ろしい速度で放たれる遮蔽物を無視して攻撃可能な光線である以上。それを防げる者など本当に僅かなのだ。
しかし……

「効かなーい！　意味なーい！　えひひひひフフフ」

「何……？」

「アタシの『空間歪曲（フロアディストネーション）』に曲げられないモノなんてなーいのよ！
バァーーーーカ！」

確実に頭を吹き飛ばすはずの光線が、３m程手前で上方へと曲がった。
そして耳障りな笑い声で灰色の少女は笑い続ける。

「むぎの、フレンダ達と連絡が取れなくなった」

「……チッ」

更に告げられる情報に、麦野のボルテージが上がっていく。
その間にも目の前の灰色の少女は大きな声で笑い続ける。
思わず舌打ちをした麦野は、灰色の少女へと数本連続で光線を放った。

「さっさと終わらせるわよ。アレ、見てて不愉快だから」

鳴川と絹旗とフレンダ達がいる路地より少し離れた路地の上で。

冷静にキレはじめた麦野と、灰色の少女たる曲亭廻との戦いが始まった。

第一話（後書き）

あとがき

いきなり超展開すぎて作者にも何が起きてるか分からなかった。

たぶん（ｒｙ

第二話（前書き）

ちょっとメンドクサイかもしれ……大丈夫かね。

第二話

熾烈を極める戦いが続いていた。
レベル５である麦野の力が、レベル４である曲亭廻に劣っているはずも無いのだが、いかんせん相性が悪い。
元々が直線的な光線攻撃が主体の麦野だ。
それら全てを無理矢理歪曲する能力があるのでは、攻撃を行う手段が封じられたに等しい。地面や建物ごと曲げている様子を見るに、接近戦を行うということもできないだろう。

「ひしししししくひゃっはははははァ！」

「あーもー耳障りだなクソ女！」

おもむろに懐から一枚の板状の物を取り出した麦野はそれを宙に投げた。
そして、その『拡散支援半導体（シリコンバーン）』に向かって白く輝く光線を発射した。
光線は『拡散支援半導体（シリコンバーン）』によって拡散し、点ではなく面での攻撃として曲亭へと襲い掛かった。
未だに『空間歪曲』という能力の詳細は把握していないが、面による攻撃ならば曲げ切ることはできないだろうと判断した。幸い攻撃を反射するような能力ではないので、これが駄目ならまた他の方法もあるのだ。

「意味ねぇんだよォォォォォ！」

「……面倒な相手」

麦野の攻撃はしかし、またも歪曲させられた。
更に大規模な攻撃をすることは可能だが、それをすれば周囲が消滅しかねない。曲亭廻が麦野の攻撃を幾許かでも歪曲できるのなら、周囲が消滅する危険性は更に増大する。
一応ここはただの路地裏であり、大規模破壊行動なんてのはさすがに抑えるべきところである。

「どうするむぎの？」

「……爆弾使うのが一番ね」

腹立だしそうに麦野は言った。このまま麦野が攻撃を続けても、結局は消耗戦になるだろう。
それなら歪曲云々が関係なしに爆弾を至近距離で爆発させたほうが早いだろうし確実だ。
未だに何に作用する能力なのかはわかっていないが、とりあえず今の所はその方法が的確だろう。
実際に麦野の攻撃は防がれているわけだし、現状ではそう打つ手は無いのだ。

「でも、フレンダと連絡が……」

「なんとかなるわ。いくらなんでも、そう簡単にはやられないでしょう」

あっさりとそう言ってのけるのは、仲間への信頼からか冷静な判断からか。

そんな麦野へと、彼女へ対する遠距離での攻撃手段がないと踏んでいた曲亭廻が新たな攻撃を開始した。
おそらくは曲亭の方も近づいてこない麦野に対してイライラしてきていたのだろうが――

＝＝＝

「なんかやばい感じがするけど頑張ってくれフレンダー」

「丸投げ！？　後でなんか奢ってよね！」

「りょうかーいいだだだだだっ！」

ギリギリと手錠をかけられた手を踏まれ、鳴川が痛みに声を上げる。
その上にはスキンヘッドの男、夷霞佐伯が佇む。
厳つい無表情の顔が、激戦を展開する絹旗とホスト男、そしてすぐ近くで身構えるフレンダに交互に眼をやっていた。
鳴川はフレンダに希望を託したいところだったが、いかんせん不安な気持ちがぬぐえない。夷霞という男は筋骨隆々であるわけではないが、それでもフレンダよりはずっと強そうに見えるのだ。
それでも鳴川は今動くことができないので、『アイテム』であるフレンダを信頼することにした。

「……」

「スタンバトンかよ。おいフレンダ、油断はあばばばばば」

無言で腰から警棒を抜いた夷霞が、バチバチ電流を纏い始めたそれを鳴川の首に向かって振り下ろした。
いくら不死身とはいえ、特別に耐性が高いわけでもない鳴川はあっさりと気絶。
それを確認した夷霞は改めてフレンダに身構えた。

「無駄口は嫌い、だ。さっさと片付ける、ぞ」

夷霞はそう言って、スタンバトンをもう一本腰から取り出した。
そうしてフレンダへと突っかかろうとして、フレンダの表情に気づいた。
にんまりと、さも嬉しそうな笑顔を浮かべている。
そして鳴川の傍に未だに立っている夷霞へ向けて言った。

「あんたも結局、鳴川と同じ馬鹿な訳ね」

そんな事を言ったフレンダが、ポケットから何かを取り出した。
大きめのライターのような形をした、リモコン装置。
しかしスキンヘッドの男はピクリとも動じない。

「無駄、だ。菅沼が無効化させている、ぞ」

「へー、そうなんだー」

「……？」

フレンダの不自然な棒読みに、夷霞は小首をかしげた。
そして同時に思考をめぐらせる。
相手は少女であるとはいえ、暗部に組しているのだ。もしかしたら

菅沼の能力を何とかしている可能性もある。
もしくは、能力を使って直接爆弾を作動させる方法があるのかもしれない。
夷霞の知る菅沼の能力。それは、『磁力使い（マグネトロマスター）』と呼ばれるものだ。
磁力ならば『電撃使い（エレクトロマスター）』も使うことができるが、それとは若干趣が異なる。金属を思いのままに操るのはもちろん、磁力によって近辺の機械類を全滅させる事もできる。『仕事』の際に飛び散った血液の掃除は、そのおかげでいつも菅沼の仕事だ。それ以外にもまだ奥の手がいくつかあると、夷霞は菅沼からそのように聞いている。
しかし、その菅沼が能力を発動させた以上、リモコン爆弾の類は全て無効化したはずなのだ。なのに何故――？

しかし、夷霞の思考はそこで中断された。

夷霞の予想外の爆発が、意識の外から彼に襲いかかったのだ。
それも背後。鳴川が倒れていたはずの場所から。
あり得ない事態に夷霞は混乱した。背中に走る激痛に耐えながらも、なんとか冷静になろうと混乱からぬけだそうとする。
しかし、そんな大きな隙をフレンダが見逃すはずもない。
背後からの爆発によって自分の方へと吹き飛んできた夷霞を、フレンダは靴に仕込んだ刃物で仕留めようとする。
吹き飛んできた夷霞は未だによろめいているが、それも当然だろう。フレンダが鳴川へと仕込んでいた爆弾は簡単な時限式だったが、爆弾自体は高性能で辺り一帯に破片をまき散らすものだ。背中に仕掛けられたことに気づいていなかった鳴川は悲惨な状況になっていたが、うつ伏せになっていたために鳴川の背中の上で爆発したそれの破片は、夷霞の体へとしっかりと食い込んでいた。

「ぎぃ……ぐ！」

「おっとと、危ない危ない」

それでも何故か倒れない夷霞は、スタンバトンを振り回してフレンダを近づけまいとする。
最後の悪あがきだろう、そう判断したフレンダが普通に銃火器で夷霞を仕留めようとしたところで、夷霞の後ろに人影が現れた。

「殺す気か！」

「いや、鳴川は死なないじゃん。それにそんな事したら私が麦野に殺されるし」

「死ななきゃなんでもしていいってかよ」

「うん」

にっこりと邪気の無い笑顔で微笑むフレンダだが、いってる事もやってる事もえげつない。
鳴川はやだやだと思いながらも目の前の夷霞に目を向ける。
その夷霞は壁際にもたれ掛かって虫の息。既にスタンバトンも地面に落としている。

「ふ。まったく、な。してやられ、た」

「そうか。とりあえず聞きたいことがあるんだが――」

「鳴川、私たち上からそいつらを捕まえるか殺すかするように言われてるんだけど」

「まぁ少しくらい待てよ」

ぽんぽんと手で爆弾を弄ぶフレンダを抑え、鳴川は夷霞の前に出た。
聞く内容はもちろん、鳴川がここへ来た理由だ。
アレに近づいて現れた以上、、夷霞はその情報を持っているはず。

「曲亭廻って奴を知ってるか？」

「リーダーのこと、か。それに貴様、様子を見るに『自動再生（リジェネレーション）』の不死身だ、な」

「俺、そんなに有名なのかよ。というかアイツがお前らのリーダーとか、マジか……」

二つの情報がどちらもショックだったのか、鳴川は頭を抱えた。
もちろんレベル5であるとされる人間なのだから有名は当たり前だが、一発で決め付けられるほど有名だとは思っていなかったようだ。
しかしそれ以上に、曲亭廻がこいつらのリーダーであり、アイテムと戦闘しているという事の方が彼にとっては重大だった。
彼にとっての曲亭はトラウマのようなモノであり、いくら麦野たちアイテムが強いと知ってはいても、さすがに楽観視はできないことだ。彼はその身をもって曲亭の『空間歪曲』を経験しているのだ。
念動力よりも、ワザと中途半端にしたような『空間移動（テレポート）』のような能力であると表現するのが最も近いだろうか。それすらもただの例えであって本質は違うものなのであろうが。

「麦野が心配だな。フレンダ、ここと絹旗は任せていいか？　どうせ麦野と滝壺は一緒だろう」

「ん、わかった。場所は教えるから勝手にしてね」

夷霞へと数個の爆弾を放り投げながら、フレンダが鳴川に言った。
相変わらずそういう仕事もあっさりこなすフレンダに、ちょっと怖いけど仕方ないかなぁと思う鳴川なのであった。
綺麗さっぱり吹き飛んだのか、生々しい血の跡を残して消えた夷霞。
鳴川がフレンダから作戦の全容を含めた話を聞いていた時に、そこへ罵声が飛び込んできた。

「くっそー！　超ウザイあのキザ野郎！　逃がした！」

そんな事を言う絹旗が、近くの壁に鉄材を投げつけて穴を開けた。
どうやら彼女はあのキザ野郎を逃がしたようだ。
どんな方法で逃げたのか気になった鳴川が絹旗へ問いかけると、意外な答えが返ってきた。

「飛んだ！？」

「そうなんですよ。まぁ、色々と手の内を晒してくれたから能力はわかりましたけどね」

どうやら絹旗も少し落ち着いたようだ。難しい顔で考え込んで、戦った相手の能力の想像がついたらしい。
しかし、決着は着かなかったものの戦闘は終了した。
これで現在も戦闘を継続中なのは麦野たちだけという事になる。

「とにっかう。戦闘が終わったなら麦野たちの所に行こう。心配なんだ」

「どっちが？」

「両方！」

「チッ、つまらないですね」

何がだ！　そう叫びたくなりつつも鳴川は抑えた。どうせくだらない事なんだから、そんな事聞いても仕方ない。
そうして女子二人からの戯言を聞き流しつつ、麦野の元へ向かう3人。
しかし、鳴川の心配は無用のモノとなる。
鳴川の弱さが思うほどに、レベル5とはそうも安っぽく脆いものではなかったのだ。

＝＝＝

「……っと、危ないわね。滝壺、次の攻撃は？」

「大丈夫。ＡＩＭ拡散力場の作用で予測できてる」

「そう。にしても相手も馬鹿ね。おとなしく篭ってれば少しは善戦できたかもしれないのに」

麦野や滝壺がそんな会話を交わす中で、再び彼女らの目の前の空間が歪曲した。
それと同時、麦野が発射した『原始崩し』の光線が曲亭廻という少女の『右足』を吹き飛ばした。
傷口が焼きつき、それでも傷跡から鮮血が吹き出ようとした瞬間。
能力によって捻じ曲げられた傷口が、その出血場所を閉じてしまっ

た。
しかし既に。
散々麦野をコケにしていた曲亭廻の両手は吹き飛び、これで足すらも失ったことになる。
「ギッ……ヒフフフッヒャァッ！」
それでも笑い声を上げるのは、その少女が完全に壊れてしまっているからなのか。
無作為に能力を発動し続け、その周囲はまるで異空間のようになっている。

『空間歪曲』。その名の通り、空間を歪曲する能力。
狂った曲亭廻が使うその能力は、自分の周囲数ｍに入るもの全てを好き勝手に捻じ曲げてしまうというものだ。材質も、質量も関係ない。位相をずらすかのように物体そのものを回転を描くように移動させ、結果として歪曲させる。
しかしその使い方は他にもある。
本来なら、その力を遠距離にも通用させることができるはずだった。精密に、狙った位置を歪曲させる。
狂った曲亭廻にはそれができない。しかしその代わりに、多数の歪曲を同時に一定方向へバラ撒く事ができる。通常ならばそれで通用したかもしれないが、これも相性と言うべきか。麦野の傍には、ＡＩＭ拡散力場をモロに作用させて働く『空間歪曲』の発動場所を察知できる滝壺がいた。
そして不幸なことに、ドーム型の歪曲と遠距離型の歪曲を、曲亭廻は同時に使うことができなかった。
「クソッ！　クソッ！　クソッ！　動けクソッ！」

「ま、あの世でいつまでもやってなさい」

いつまでもドーム型でいれば良かっただけなのに、それを解除したのは狂っていた曲亭のミス。
一撃で殺せる曲亭を麦野がじわじわと嬲ったのは、単にムカついていたからだろうか。
どちらにしても、次で終わりだということは明確だった。

「これで、おしまいね」

滝壺と共に歪曲を避けた麦野が放った光線が、曲亭の頭を綺麗に吹き飛ばした。
これで、戦いは終わった。
少なくとも、今は。

第二話（後書き）

あとがき

疲れた。もの凄く疲れた。
というか理論とか結構無茶苦茶言ってるかも知れん。
ドラム式フルオート散弾銃とか、登場させたいなぁ。
ロマンだよねぇ。

第三話（前書き）

ちょっと追記。

第三話

鳴川たちが麦野の下へ駆けつけた時、既に全てが終わっていた。麦野に殺されたであろう曲亭廻の血の跡だけが、そこには残っていた。死体はほとんど見当たらない……手も足も頭もない、真ん中に大きな穴が一つ開いた達磨状態の死体以外は。

「……」

「なんで鳴川がいるかは知らないけど、これの知り合い？」

「昔のな。死体だけじゃ気づかなかったけど、周りを見れば一目瞭然だよ」

麦野に訪ねられ、鳴川は周囲を見回しながら言った。コンクリートも鉄筋も、同じように螺旋状にぐにゃりと曲がっている。情報は少なかったが、鳴川にはそれだけで十分すぎるほど十分だった。

ここで、麦野と曲亭が戦ったのだ。そして、麦野が勝利した。彼の心配は杞憂だったようだ。

「まぁ、無事でよかったぜ。二人とも」

傷らしい傷なんて一つもない二人に、鳴川はそんな言葉を送った。曲亭の攻撃はほぼ一撃必殺と言っていいし、周りの状況を見ても凄まじいものが伺える。

なにより、本当に心配で仕方なかったのだ。
彼自身が何度も何度も死を体験した相手に、彼の大切な人が殺されてしまうんじゃないかと。

「麦野、鳴川ってば麦野のこと超心配してましたよ」

「うんうん。結局鳴川は断然麦野が――」

「ストォップ！　何を言ってやがりますかお二人さん！」

ただ、いくら心配でも言って良いこと悪いことはあるものだ。
鳴川としてはちゃんと麦野も滝壺も心配していたのだし、それにそういうことを言われるのは正直恥ずかしいものがある。
恥ずかしいついでに、その後の展開が怖いということもある。

「へぇ……」

案の定と言うべきか、麦野が鳴川に向かってつかつかと近づいてきた。
なんか顔が怖い。鳴川はそう思った。いつも彼の前の麦野はSっぽいんだが、戦いの後だからなのか知らないが更に怖かった。
ちなみに今の鳴川は、下半身は十学区に来た時のままだが、上半身はフレンダの爆弾を食らってボロボロである。それに汚れ具合も手伝って、絵的には完全に鳴川の方が不良のように見える。
そんな絵面なのに、お嬢様っぽい麦野にびびりまくる不良っぽい鳴川は周りから見ていてかなり面白かった。アイテムの面々が和んでるのも主にそれが原因である。

「あんなイカレ女に私がやられるわけないでしょ？」

「そ、そうだな」

「何？　それとも私のことをそんなに弱いとでも思ってた？」

「いや。いやいやいやいやそんなことは思ってない。思ってないけど心配だろ？」

鳴川の言葉に嘘はない。嘘はないのだが、麦野のプライドの琴線を微妙に掠っている。

レベル5ですらない能力者を相手にしただけなのに、一々心配なんてせずに信頼して欲しいというのが内情だろうか。まぁ、麦野の名誉のために明言はしないでおくが。

自分よりも少し背の低い麦野に睨まれて、そのまま腕を伸ばされた瞬間に鳴川はビクリと震えて覚悟した。「あぁ、またぶち殺されるんだろうな」と。

「ほら、ちょっとかがみなさい」

「……ゑ？」

「いいからさっさとしろ」

「はいぃっ！」

いきなり声のトーンが落ちた麦野に鳴川は半ば悲鳴のような声を上げて体勢を低くした。

低くしすぎて麦野の頭の位置より若干低くなるくらいだ。

だが、麦野的にはそれくらいがちょうどよかったらしい。

次の瞬間、ビシッという打撃音と共に鳴川の額に衝撃が走った。

「あでっ」

「まぁ、確かに厄介な相手だったからこれだけで済ませてあげる」

デコピン一発で許すとは、麦野にしてはとんでもなく寛大である。
一応心配してくれたことに関しては評価しているようだ。
アイテムの他のメンバーなんか「やっぱり」というような顔で二人を見ているが、どうやら全部お見通しだったようだ。
戦いの後だというのに現金な奴らだ。さっきまで戦っていた奴らのことなどうでもいいのだろう。

「で、あのキチガイとはどういう知り合いだったの？」

「わたしも気になる」

しばらくしてから麦野が鳴川にそう尋ねた。キチガイこと曲亭廻を見ている滝壺も若干興味があるらしい。
既にアイテム側の事後処理も大体終わっていて、妨害した二名のうち一名は逃亡したが、『本目標』である曲亭は死亡確認で仕事は終了している。
今は他のアイテムメンバーも一緒に、全員揃って少し離れた所のファミレスにやってきていた。
麦野が尋ねたのは、全員が一口ずつソフトドリンクを口にした頃合だ。

「話せば、長くなるな……」

鳴川は話すのを渋る。
なにせ曲亭廻の事を話すとなると、自分の過去を露にするのと同じようなものだ。

まぁ、意図的に省くことはできるが、それで麦野たちが納得するかはわからない。

「いいから言いなさいよ」

「……やれやれ。わかったよ。話させてもらうさ」

怪しく光る指先を突きつけられて、鳴川はため息をつきつつ了承した。

そしてアイテムメンバーがおやつを摘みながら鳴川の方を見ている中で、彼は昔の話を語り始めた。

それは数年前、黄泉川愛穂に保護されるよりも前、とある計画に参加するよりも前、一つの研究所の中での話だ。

＝＝＝

乗客全員死亡、それが表向きに発された情報。

大型ジャンボがどういった理由かはわからないが墜落した。それは一時期、少しだけ有名だった事故。

そこにいて死ななかったただ一人の子供を、学園都市の研究者の一人である『逆峰黄土（さかみねおうど）』が捕獲した。

その子供こそが鳴川昴。

どういった手段を用いても殺せない、絶対に死なない子供だった。
逆峰黄土が鳴川を連れ帰った研究所で、彼は結構の研究材料となった。
どのような傷を受けても復元するのか、本当に死なないようにまずは腕だけで試された。四肢を串刺しにされ、鉄が溶けるほどの炎で焼かれ、腕を切り刻まれてミンチにされ、凍らされて粉々にされ。それでも死なないとわかれば、実験は四肢だけではなく身体にも及び、脳への研究や実験も同時進行で行われるようになった。
研究員の一部は初め諌めようとしたが、逆峰黄土は言った。

「どうせ死なぬよ？　諸君らも理解しろ、これは人の姿をした化け物だぞ？」

事実、鳴川はどれだけ非道な実験を受けても死ななかった。
首を切り落としても頭に穴を開けても再生するそれが、実際には『能力』の範疇をも越えていると理解しても研究を止めることなどできなかった。
一度消えた腕も一瞬で生えてくる身体、死ぬ程の痛みを何度受けても瓦解しない精神、それら全てが鳴川の持つ力に起因した『何か』であるのだと、そんな曖昧な実験結果。
最高の実験材料を前にすれば、実際に倫理観が消えそうな実験を眼にすれば、研究員達の良心は跡形も無く消えていた。

曲亭廻も、そんな研究所にいた一人だった。
もちろん鳴川と友好的な関係にあったはずもない。実際に彼が来た頃には、曲亭は精神が崩壊していたのだから。
それは逆峰黄土が実験を用いて、曲亭の発現した『空間歪曲』という貴重な能力を高めようとしたためだったのだが、代償はあまりにも大きかったと言えるだろう。

そして精神が破綻した曲亭廻は何をしたか。

「ほーら。ほーら」

「ぎぅ……ぐぇ……」

「あはははは」

一つの部屋に響くのは可愛らしい女の子の声だが、そこで行われていることは凄惨などというものを越えている。
幼い鳴川の小さな身体は捻じ曲がり、手足も、首も、頭も、何もかもが曲がっていく。
息もできない。心臓など動く道理も無い。思考など当に停止している。
それでも、鳴川は生きていた。
部屋の外からその様子を眺めるのは大勢の研究者達。
曲亭廻は鳴川を殺すための道具だった。同じ部屋に入れられて、毎日毎日研究者達からの指示が無い日も殺され続けた。
鳴川は決して壊れてしまうことは無かったが、それでも。
曲亭廻という、鳴川が他の研究所に移るまで彼を殺し続けていた存在のことは、彼の記憶の根底にまで刻み込まれた。

＝＝＝

「ま、殺されすぎて嫌いになったって感じだな」

へらりと笑って鳴川は言った。
全部昔の事だから今はそんなに気にしていないし、気にして欲しくもなかった。
……まぁアイテム連中が、特に麦野がそんなのを気にするようなセンチメンタルな奴ではないとわかってはいたのだが。

「へぇ。あんたも結構大変だったのね」

「ま、そこそこはな」

別に鳴川だって不幸自慢をしたくて話したわけではないから、こういうなんでもないような対応は嬉しかった。
普通ならこんなファミレスでおやつ食べながら聞く話でもないだろうが、生憎と彼女らも普通ではない。
鳴川程に殺されまくるなんてのは稀有な体験だろうが、各々がそれなりに暗い人生を送っている。だからこそ暗部の組織になんて所属しているのだ
ドリンクを飲みながら話を聞いていた彼女らも、鳴川の話を聞いて思うところはあっても可哀想などとは思っていない。

「鳴川も昔は大変だった訳ね～。今はこんなんだけど」

「ですね。今は超馬鹿な平和野郎ですけど」

「お前らさ……別にいいけど」

やれやれと思いながらも鳴川もポテトを摘む。
不死身なんていう力を持ってしまった彼が、こうして平和な日常を送っているのは確かに馬鹿みたいな話だ。学園都市の底にあるような研究所から抜け出せたのも、ありえないくらいの奇跡が働いた結

果だ。
いつかは目の前のこいつらも……そう思って鳴川は考えを止めた。
そこから先まで考えてしまうのは、さすがに彼の領分じゃないだろう。彼の痛みや苦しみを彼女らが経験することが無いように、彼女らのここにいる理由も鳴川は知らないのだ。

「さて。なんか気分がいい。今日は俺の驕りにしてやるよ」

「お。めずらしー」

「超怪しいです。なんか企んでますか？」

「……予測してたさ」

普段は結構ケチだからな。甘いものを買うために。
ま、気にはしないさ。曲亭廻が死んだってのはハッキリして気分が楽だ。
いくらでも食うがいいさ。最近、臨時収入があったからな。

「……っていうか結局、鳴川は麦野に奢ってもらうとかいうのはもういいわけね」

「一度言った事は撤回しないから、そのうち奢ってやるわよ」

（き、聞こえてたー？）

小声で言った事に麦野が反応して、フレンダは思わずビクリと震えた。
麦野はと言えば、なんともいえない顔で鳴川の方を見ながらコップに口をつけている。

当然、鳴川を心配しているわけではない。
彼女も鳴川がただの平和なお人よしではないのは知っていたが、改めて鳴川が学園都市の暗部にどっぷり漬かっていたということを知って安心しただけだ。どういった意味での安心なのかはともかく、だが。

「ひとまず、一件落着か。疲れる一日だ」

そんな事を言ってぼやく鳴川だが、まだ一日は終わったわけではない。
既にフレンダたちはメニューを見て注文し始めているが、外はまだ夕日すら姿を見せていないのだ。
鳴川にとって、長い一日になりそうだ。

「あ、鳴川」

「なんだ麦野？」

「どうせ暇だろうからこの後付き合ってね。荷物もちで」

「……」

本当に、長い一日になるようだ。

＝＝＝

すっかり日も暮れ、だんだん涼しくなってきた時間帯。
鳴川はずっと麦野につきあわされていたが、そんな時間にやっと解放された。
アイテム連中がいなくなったとはいえ、麦野の付き人として麦野が服を買うようなところに連れて行かないで欲しいと思う鳴川であった。
もっとも、麦野の服だけを買ったわけではなかったのだが……

「まぁ、服をプレゼントさせられなかっただけマシか」

それどころか、麦野という美人に服を選んでもらったりもしたのだからそれで満足しておくべきだろう。
人気の少ない道をとぼとぼ歩きながら、鳴川はそんなことを思っていた。
麦野と買い物するために行った店から鳴川の住んでいるマンションまでは結構な距離があったのだが、風紀委員で色々と駆け回った時に近道になる裏路地ルートも記憶しておいたのだ。
そんな裏路地は危険だから通ろうとするものはいないだろうが、不死身の鳴川にとってはどうということは無かった。
だいたい、治安の悪さにビビって風紀委員ができるわけないのだ。

「しかし……」

妙に静かだ。
そう言おうとして、鳴川は口を動かすのを止めた。
静か過ぎるだけじゃない。路地裏を通り抜ける夏の風に、何かの匂いが混ざっている。

それは鳴川にとって、嫌になるほど嗅ぎ慣れた匂いだった。

「血の匂い？　喧嘩か何か……だったらいいんだが」

半ばそんな事があるわけないと思いつつも鳴川は匂いをたどる。
鳴川は犬のように鼻が利くわけではないが、血の匂いにだけは異常なほどに敏感なのだ。急いで走って、血の匂いの大本の場所へと鳴川は急いだ。
彼自身にも経験があるが、こういう場所には大抵黒い噂と言うか、思い出したくも無い実験が行われていたりする。
とてつもなく嫌な感じがしながらも、目的の場所へとたどり着いた鳴川が見たものは。

どこかで見たような少女が、血の海に沈んでいる光景だった。

第三話（後書き）

あとがき

オチはいつものオチです。
無理やり感ですがメインはやったからもういいです。
次からはまた色々ですね。

第四話

どこかで見たような制服の少女が、血の海の中に倒れている。
さっきから鳴川が感じていた匂いは、その少女のものだったのだ。
鳴川は急いで駆け寄るが、既に息はない。しかしまだ暖かいその体は、まだ死んでいない、もしくは死んで間もない事を示していた。
これを起こした者は既にその場にいないが、いつ戻ってくるとも限らないと鳴川は考えた。
何より鳴川は、外傷のハッキリしないその少女が死んでいるとは思いたくなかった。可能性が少しでもあるのなら、生きていると思いたかったのだ。

「……血が流れすぎだ。クッソ。幸い病院は近いが――」

急ぎ鳴川はその血塗れの少女を抱き上げた。鳴川が間近から見ても、血塗れの顔は判別がつかなかった。
鳴川が抱き上げたその身体は、恐ろしいほどに軽かった。ゾッとしながらすぐに駆け出そうとして、足に何かが引っかかる。
下を少しだけ見て、鳴川は後悔した。
足だ。そこにあるのはその少女の足だった。軽いのは、血が流れ出ていたからというだけではなかった。

「畜生……」

こんなもん、死んでいるに決まっている。
そう思いつつも、もう一度強く抱き上げた少女を抱えなおす。

例え死んでも、少しくらいならば何とかする術が彼にはあった。もちろん、彼一人で出来ることではないのだが。
とにかく急いで病院に行かねばと急ぐ彼は、しかし目の前に表れた複数の影に足を止めた。

「その個体はもう死んでいます、とミサカは部外者に通達します」

「……お前は」

「あなたには関係のない事です、とミサカは部外者に忠告します」

「それを渡してください、とミサカは部外者に命令します」

「なるほど。お前ら、クローンか」

何かを納得したかのように、鳴川はぐっと奥歯をかみ締める。
彼の持つ情報は少ないが、しかしこういった状況と、クローンというものに対する知識はあった。

「御坂のクローンってわけか。道理で似すぎてるわけだ」

乾いた笑いを漏らし、鳴川は自嘲する。
もっと早く、気付いて当然だった。クローンと言う存在を知っている以上、それが有り得るのだと思っておくべきだった。彼の経験したケースが特殊だったのかもしれないと、彼自身が自覚しておくべきだった。
そうすれば、もっと早くに何かをすることが出来たのかもしれない。
もしも何も出来なかったとしても、何かしたという自己満足はできたのかもしれない。自己満足かもしれなくても、努力することは出来たのかもしれない。

「さぁ、とミサカは部外者を促します」

「部外者部外者とうるせえよ。確かに今はそうだろうがな。かといって、一度助けると決めた奴を捨ててくほどに逃げ腰じゃねぇ」

自分へと一歩踏み出したミサカたちに、死んだミサカの身体を抱えた鳴川は言った。

死と生と、この世に内在する二つの真理を幾度と無く体験した彼だからこそ。

命の重さと、命の強さと、命の儚さを知っている。

そして命が、そう簡単に消え去ってはしないことも知っている。

「お前らが参加してる実験、どうせ俺がいた頃のデータも使ってんだろうが。交渉しろ」

「……コード認証を――」

おそらくは連絡を取ろうとしたのだろう、ミサカ達の一人に先んじて鳴川は言う。

「ＺＸＣ７４１ＡＳＤ８５２ＱＷＥ９６３、だ。俺の記憶が確かなら、合ってるはずだ」

一体何故知っているのか。

そんな疑問を浮かべる前に、ミサカ達は行動に移した。

鳴川昴と言う名なら、彼女達は既に知っている。しかし、どこまで関わっていたかどうかは詳しくは知らない。

それを知っているのは、彼女たちの参加する実験に前から参加している研究者達だけだ。

「どうせお前達は死体の処理にきただけなんだろう。だから交渉は後回しだ。今は、俺の都合で動かさせてもらう」

「しかしそれは」

「まだ許可が下りていません」

「とミサカは困惑します」

有無を言わせぬ鳴川の口調に、ミサカは無表情で困惑を告げる。
実際に困惑しているかどうかなど怪しいものだが、勝手な真似をされると困るという事なのだろう。
しかし鳴川にとってそんな事は関係ない。

「どうせ許可は下りるさ。死んでるって事は実験後のはずだ。これは用済みだろう？」

ならば、文句は言わせない。お前らが用済みにした可哀想な命は、勝手に俺が貰っていく。
鳴川はミサカたちの傍を横切り、全力で走って知り合いの医者がいる病院へと向かう。
どんなモノであろうと治療する、鳴川昴という医者要らずな男の体の謎を知っている医者の元へ。

「まさか、君がこうして僕の元に来るとは思わなかったよ」

「そうだな。俺は怪我しねーもんな」

鳴川は血塗れになった服を着替え、『冥土返し』と呼ばれる医者から借りた衣服に着替えていた。
今はその医者の言われるままに診察室で向き合って話をしている最中だ。

「で、治るんですか？」

「さすがに、あんな死体（かんじゃ）は見たことが無いけどね？」

ほぼ完全に死んでいたと、医者は言った。
少なくとも脳はまだ生きていて、今は半分以上死んだままで固定しているのだとか。
内臓が全部イかれていて、歪んだ骨が胴体を串刺している状態。
ここに連れて来たのが鳴川ではなく、ここにいたのが『冥土返し』と呼ばれる医者でなければ、即死扱いであっただろう。

「普通なら義体で補うけど、ここには君がいる。心臓を含めた内蔵全てを義体と入れ替えるのは、僕がやってもさすがに影響があるからね？」

「……それで、どうするんですか？」

「君の体を借りるよ、協力したいんだろう？」

「あぁ。思う存分使ってくれ。どうせ、減りはしないんだから」

自嘲的に笑ってそう言った鳴川を連れて、医者は少女の処置へと向かう。
これで少女は生をつかむだろう。

なにしろ、その医者が救おうとして救えなかった命は無いのだから。

＝＝＝

施術が終わり、鳴川は帰途についた。
その足取りは重い。
帰る間際になってどこからかかかってきた電話を、鳴川は『冥土返し』から受け取って応対した。
その電話は元から鳴川に対してかかってきたものであり、今回の件についてのことだった。

「次は無い、ね。今回の事がチャラになっただけで儲けもんだろ」

実のところ、研究所に連れ戻されてもおかしくない程の事をしているのだという自覚が鳴川にはあった。
まぁ、結局は使い終わった死体なんてものはどうでもいいという事なのだろう。
今回の忠告は、そっちに首を突っ込みすぎたことに対するものだろう。
突っ込むといえばアイテムという暗部組織に手を貸しまくったりもしているが、本格的に首を突っ込んだわけではない。
あのミサカ達の使われている実験にこれ以上首を突っ込む事は、さすがにまずいという事だろう。
最も、これ以上首を突っ込む気は鳴川には毛頭無かったので忠告はほとんど無意味だろうが。

あそこで意地でも少女を助けようとしたのは、助けようと思った気持ちを無駄にしたくは無かったからだ。
だから二度目は無い。危険だとわかっていて首を突っ込むなんてのは、バカのすることだからだ。
命の危険、というわけではない。
鳴川が、鳴川として生きていくために。彼自身の出来る事の範疇を越えた行いをして、やっと手に入れることが出来た概ね平和な生活を無くしてしまいたくは無いのだ。

「ま、十分に逃げ腰だけどさ」

それでも、自分を失うよりは良い。
今回の件も、ギリギリな事を行って上手くできたのだからそれでいい。
結果論にはなってしまうが、鳴川は外道や非道になりたくなかったから行動して、自分の中の偽善者な部分を守りたくて行動して、それでいて日常というものを失いたくなかったのだ。
行動基準も矛盾しているし、考えていることもそうだ。
それでも彼は、こうして得られた結果に満足している。
綱渡りな行為だったかもしれないが、こうして得られた最高な結果が全てなのだ。

そのまま、ゆっくりと歩いて自分の部屋へと帰りついた鳴川は、修理中の天井を見上げながら眠りに付いた。

そして。

「死ぃねえええええええええええ！」

「ぐ、ぎぁあああああああああああ」

天井を突き破って降ってきた赤錆びた鉄柱に串刺しにされた。
メキメキと胸を突きぬけベッドごと穴をあけられた後、その串刺しのままで天井の穴からマンションの屋上まで引きずり出された。

「おま、ご、げへっ！」

「てめぇ、俺相手に喧嘩売っていつもどおりでいられると思ったのかよぉ！？」

藍色の髪の男が、鉄棒が刺さったままの鳴川の首を捕まえて吼える。
それは、あの戦いから逃げ去った菅沼光磁だった。
絹旗との戦いの後にそのまま逃げ去ってどこに行ったのかは不明だが、どうしてかここに現れた。
しかしわからないのはその姿だった。
……どうして絹旗との戦いで負傷していなかったはずの菅沼は、全身に傷を負って憤怒している？

「死ね死ね死ねよぉ！」

「……」

菅沼はグチャグチャになった右手に磁力を使って大量の釘を纏わせ、何度も何度も鳴川の顔面へと叩きつける。
自分の腕にも激痛が走るだろうに、既にそれすらも怒りで麻痺しているのだろうか。
鳴川の顔も同じくグチャグチャになるが、その程度で彼が死ぬようなことは無い。
今も心臓を貫かれ続けているにもかかわらず、全く命に別状は無いのを知れば、当たり前だとも思えるだろう。

「何故だ！　何故死なない！　少なくともさっきの貴様はそこまで化け物じゃあなかったはずだ！　死ねよ！　死にやがれよ！」

「誰の事を……ッ！？」

口からごぼごぼと血を沸きあがらせながら鳴川が何かを言いかけた時。
菅沼の背後、血で濡れる視界の中に、鳴川はそれを見つけた。
指先をこちらに向け、完全にキレた笑顔を浮かべる麦野沈利がそこにはいた。
次の瞬間。
視界が真っ白になったかと思った瞬間に、鳴川の意識は途絶えた。

＝＝＝

「最近こんなんばっかりだ」
鳴川は疲れた様子で言った。場所は夜でもやってるファミレスである。
そして目の前には、彼を窮地から救った麦野がいる。
救ったというか、正しくは丸ごと全部ぶっ飛ばしたのだが。
「どうせあんたがまたトラブルに巻き込まれたんじゃないかと思ったのよ。せっかく私が選んだ服を台無しにされたら困るしね」
「……よかった。あれは家についてすぐ箪笥にしまったんだ」
「命拾いしたわね」
それはもしかすると、今の戦闘で買った服がボロッカスになっていたらビームの刑だったという事なのだろうか。
それを想像して鳴川はゾッとした。今日何度目なのだろうか。
そんな彼に麦野が問いかけた。
「で、あれはなんなわけ？　ムカついたから殺っといたけど」
「さぁな。なんか、色々と複雑に絡んでるっぽいんだよ」
不審な所の多い先ほどの襲撃が、鳴川は気になってしょうがなかった。
菅沼の言っていた事も、負っていた怪我も、何がなんだかわからなかったのだ。
それで頭を捻って難しい顔をしていたのだが、それを見ていた麦野が言った。

「まぁいいじゃない」

「え？」

「鳴川は絶対死なないんでしょ？　なら、そういう難しいこと考えるのは後回しにしなさい」

「いや、でもな……」

そんな事を言う麦野だが、鳴川は気が気ではない。
いくら不死身とはいえ、捕まるなどしてしまえばどうしようもないのだ。
しかし麦野は続けて言った。

「あんたが心配してもどうしようもないでしょ？　結局は不死身なだけなんだから」

「う……」

「ま、役に立つ内は取り返してあげるわよ。貴重な荷物持ちだしね」

死んでも死なない、どこに連れてっても問題ない荷物持ちなんて、確かに暗部組織にとっては重宝するかもしれない。
それ以上のものがあるかもしれなかったが、少なくとも鳴川にはそんな事はわからなかった。

「……図星だからなにもいえねぇや」

「黙って食事にでも付き合いなさい」

「はいよ」

結局、鳴川は誰かに流されることになるらしい。
こうして鳴川の長い一日は終わりを迎えた。

もちろん、このファミレスでの支払いは鳴川持ちだったとか。

第四話（後書き）

あとがき

一方さんはおなかが減っていたのでさっさと帰りました。

私の地の分は鎌池と西尾から影響を受けてるでマス。

ま、気にすることは無い。

変態性は私自身のものであるからな。

一時期、婚后光子をヒロインにしようかと思っていたがそんな事は無かったぜ。

ちょっと前に出たキャラ紹介。

曲亭廻（きょくてまわり）　学園都市暗部の一人。

鳴川昴と同じ研究所の出身で、精神が破綻している。

幼い頃から、暇な時間があれば鳴川を殺して暇つぶしをしていた。

男のように見える狐目の茶色の短髪だが、実は女。

自分が一番鳴川を上手に殺すことが出来て、その権利は自分だけのものだと確信している。

暴走すると、見境なく周りのものを歪ませて壊し始める。

『パーティ』のリーダー役っぽかった。

精神的に壊れてさえいなければレベル５になる可能性があったが、

麦野によって完全に死亡。

『空間歪曲（フロアディストーション）』

念動力に近いが、本質はまるで違う。

自分の周囲の半径４ｍ以内に存在するものを、質量・材質問わずに歪ませて操ることができる。

テレポーテーションなどの空間移動系が微妙に関係している。

菅沼光磁（すがぬま こうじ）

藍の髪をオールバックにしている背の高い男。

かなり短期で、いつもクールにしている分の反動ではないかと思われる。

『パーティ』の一員。

キレると『死ね』を連呼する。

『磁力使い（マグネトロマスター）』

磁力を操る。金属を浮かして操ることが出来るため、さも怪力であるかのように鉄骨を振り回すことも出来る。

体内にある血液を操ることはできないが、体外に流れ出た血液の操作は可能。

学園都市は鉄分がいたるところに存在するので、武器には悩まない。

飛び散った血液を片付けるのは彼の仕事。

夷霞佐伯（いがすみ さえき）

見た目はスキンヘッドの中肉中背の男。

サングラスを掛けるとチンピラにしか見えないが、かなりの頭脳派。

『パーティ』の中でも一番慎重派。
特徴として、「〇〇、だ」と話す。
『念動力者』レベル３。
仲間内の通称：『致死操作（バッドニュース）』
極めて精緻な操作の可能な念動力。ただし出力自体は割り箸を折れる程度で、しかし広範囲に力を及ぼす事は可能。
相手の体内を操る演算さえ終了すればすぐさま相手の心臓に繋がる大動脈を断ち切れる。
ただ、そのためには多くの条件が必要な模様。
多少の時間をかけて相手を原子クラスに分解し、粉末状にすることもできるため、死体の片づけは彼の仕事だった。
爆発物を一瞬で解除できるわけも無く爆死？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4957m/

とある不死身の自動再生

2011年8月31日09時46分発行